

外國貿易噸量及價格累年比較表

年次	噸量		價格		額	
	出	入	出	入	出	入
大正十三年	七二,五九九	二,六五,四九九	六〇,三〇〇	四二,一五六	一八九,〇九三	九六
同十四年	八九,四九三	二,三四,一五七	七三,九三三	四七,九四八	二四六,〇〇八	六九
同十五年	八五,四九六	二,六九,二二二	五五,三九九	三五,〇七三	一六五,九五七	七三
昭和二年	八五,〇八三	二,九七,七七〇	四九,五七一	三七,四〇〇	一一,三三三	六五〇
同三年	九四,〇九七	三,〇七,四〇三	五九,九七三	四二,四三三	一六七,五三三	七〇
同四年	一,〇〇,三三八	三,二〇,五八三	五九,九七三	四二,四三三	一九八,二九〇	七〇
同五年	八二,二五三	二,八五,七四九	四八,三三八	三〇,一六六	一六六,二七四	七二
同六年	八四,八九九	三,〇三,四三四	三九,三三三	三六,七四三	一三,四八〇	八一
同七年	一,一一,三三三	三,〇九,五六八	四四,二五九	三五,七三九	七九,四八四	四〇
同八年	一,三八,八八六	三,九三,七六二	五三,九五五	五七,二二二	三六,七三三	九五〇

外國貿易品種別調 (昭和八年)

品種別	噸量		價格		額	
	出	入	出	入	出	入
食品	六四,四八	一四,二九	二,九四四	一三,四六三	△	五八,〇五
食料	七三,二二	二,三三,四〇八	三,一五三	三三,五九三	△	三三,四四六
原料	二五,〇九五	一,二九,〇七九	七,一〇一	二〇,六三〇	△	九五,五七一
原料製品	九六,〇六一	七九,一三六	四六,六四八	七,五四八	四五,〇九九	四五
全製品	三三三	一四,八四八	五六,九八一	一三,八九〇	△	一三,八三三
其他	一,三八,八八六	三,九四,七六一	五七,九五五	五七,二二二	三六,七三三	九五〇

外國貿易中特に對滿貿易に就いて見るに、昭和七年滿洲國成立以來、日滿兩國の關係は頓に緊密を加へ、殊に日滿經濟ブロック確立の氣運が漲り、彼我の經濟關係は愈々密なるものがある。即ち本港の對滿貿易を見るに昭和四年に於て噸量價額共に最高を示し、其の後漸減の形であつたが、昭和八年に至り噸量價額共嘗て見ざる數字を示した。今後兩國貿易關係の發展に正比例し、殊に本港に南滿鐵埠頭の完成さるゝ曉には、一大飛躍を爲すであらう。

滿洲國貿易噸量及價格累年比較表

年次	噸量		價格		額	
	出	入	出	入	出	入
昭和元年	三三,七〇六	五七,一三七	二四,七九六	三〇,九三三	九八,七三三	六四一
同二年	三九,一五五	六三,八四〇	二二,二七七	二五,三七〇	八七,九六六	二〇
同三年	二四,〇五一	五五,〇六六	一三,六一四	三〇,五〇〇	一五,六四三	四四
同四年	二六,一五〇	六七,九七六	一四,二〇八	三三,七四七	一〇八,一七〇	一〇一
同五年	一八,〇〇四	五九,六五三	八,四六五	二五,〇八八	五七,三六六	八六
同六年	二七,七五四	七五,三五七	五,〇六三	三六,四〇七	一三,六五六	三八
同七年	二四,八八七	六六,六六六	八,二四九	三二,八九六	五三,五三三	六六
同八年	四〇,四八八	九八,六八〇	一六,四三三	四七,三一一	一一,〇六一	八六



滿洲貿易品種別調 (昭和八年)

品 種 別	量			價			額		
	出 貨	入 貨	出△入超	出 貨	入 貨	出△入超	出 貨	入 貨	出△入超
食 料 品	四、七〇	四、四七	六三	七、八三、九五	二、八九、七七	四、九一、四九	四、九一、四九	二、八九、七七	四、九一、四九
原 料 品	四、七六	七、七〇	△六四、七〇	一、八五、四七	二、四七、六八	△九二、六六	九、三〇、三三	二、四七、六八	△九二、六六
原 料 用 製 品	六、七〇	一、九、七四	△二四、二九	二、五、六一、二九	一、六、〇七、三三	九、三〇、三三	二、五、六一、二九	一、六、〇七、三三	九、三〇、三三
全 製 品	二、九、〇二	二、四〇	三七、六〇	二、五、二九、八〇	一、三、三六、五〇	一、二、九三、三〇	二、五、二九、八〇	一、三、三六、五〇	一、二、九三、三〇
其 他	一	二、五七	△二六、五八	四、四二	三、八七、九一	△三、八六、七五	四、四二	三、八七、九一	△三、八六、七五
計	四〇、四八	九六、六八	△五七、二〇	一六〇、四三、〇〇	四七、五二、二四	一一三、〇一、八八	一六〇、四三、〇〇	四七、五二、二四	一一三、〇一、八八

五 第一次築港工事

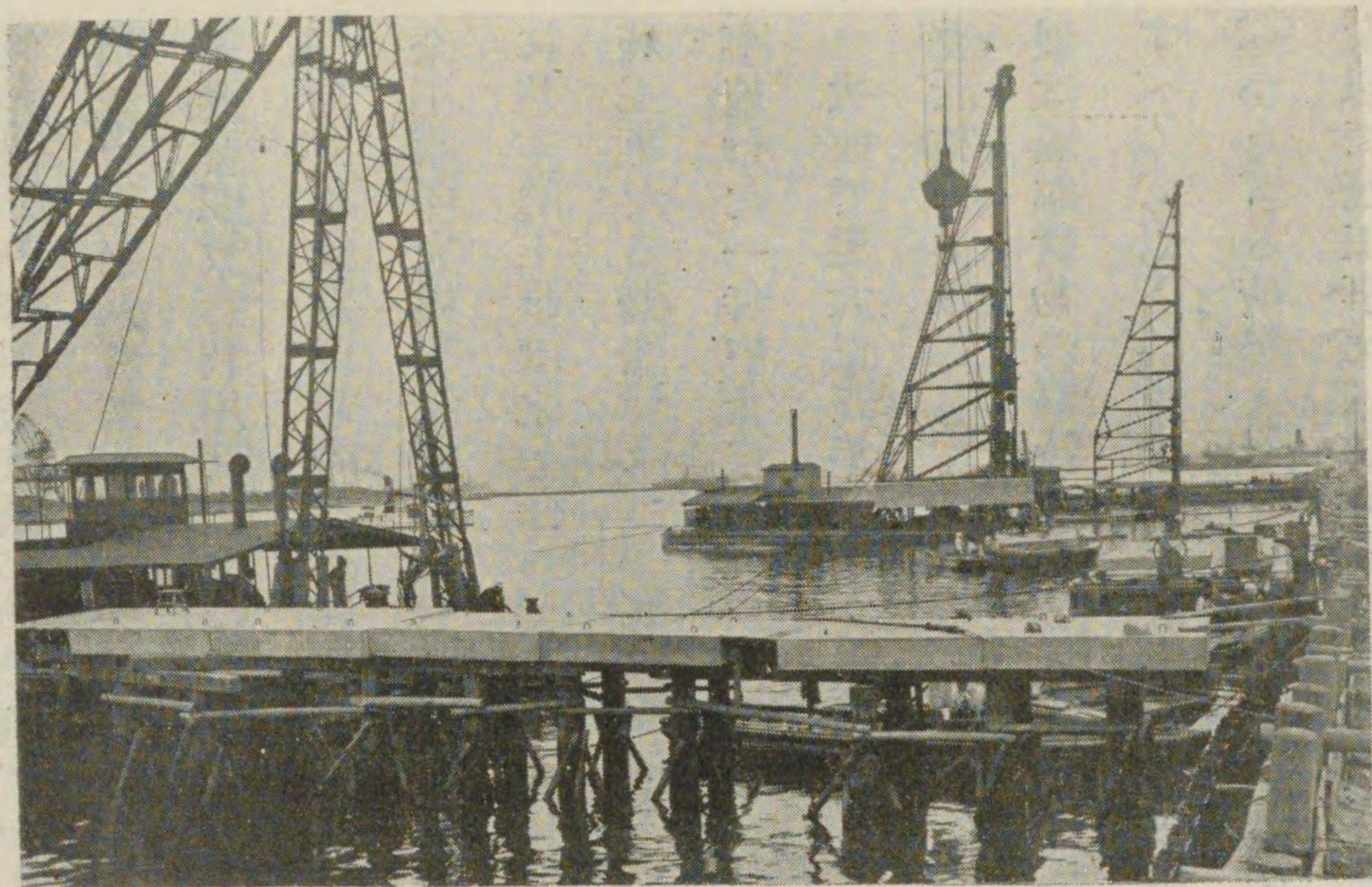
大阪港の第一次築港工事は明治三十年十月起工し、爾來年を閲すること三十有三年、遂に昭和四年三月に竣功したのであつた。當初の計畫は工費總額一千八百四萬八千圓及び工事中の公債利子四百四十四萬二千四百圓に對し、四百六十八萬圓の國庫補助金及び官有濱地八萬三千四百十三坪(時價百九十七萬八千圓)の下付を受け、八年間に竣成せんとするものであつたが、偶々日清戦後の財界變動に遭ひ、物價勞銀の昂騰、募債成績の不如意等の爲め、豫定工費に不足を告ぐるに至り、

明治三十八年工費九百二十萬圓を追加すると共に、工期を大正四年度迄延期したが、之より先明治三十六年八月防波堤の築設、港内浚渫、埋立地造成及び棧橋築造等一部工事の竣成を機として、築港を開放し利用せしめた。

斯くて鋭意工事の進捗に努めたが、再び日露戦後財界の變動に遭ひ、豫定期たる大正四年度に全工事の完成を見るに至らず、他面市財政の窮迫は工事の續行を許さない事情となつた。當時既に基本的工事は之を終へ、港灣として利用上敢て支障なかつたので、工期を更に十ヶ年延長し、残工事たる繫船岸及び一部埋立は大正十年以降五ヶ年間に完成するものとし、大正四年度限り工事施行を一時中止するの止むなきに至つた。

次いで翌大正五年に至り男爵住友吉左衛門氏と契約して、残工事の一たる第一繫船岸の築造を委託施行することとしたが、越へて大正六年歐洲大戰の影響による本市商工業の急激なる膨脹發展は船舶貨物の輻輳を齎して、大いに港灣の利用を促進せしめ、他方政府に於ても此の機運に適應すべく、多年の懸案であつた臨港鐵道敷設の議を決したので、海陸連絡設備の完成は一日も忽にすべからざる情勢となり、又市財政も前途幾分の餘裕を見るに至つたので、工費八百二十二萬四千圓を以て残工事及び之が附帶設備を六年間に竣成するの計畫を樹て、大正七年工事を開始した。然る





築 港 工 事

に又々經濟界の大變動に遭ひ、既定工費を以てしては工事を完成し難きに至つたので、大正十年工費豫算を一千五百七十五萬圓に増額し、且つ工期を大正十五年度迄延期した。而して右工費の増加額に對しては三百四十七萬四千圓の國庫補助を受けることゝなつた。然るに其の後港灣利用の實況に鑑み一部設計變更並に工事追加の要を認め、工費豫算を一千五百三十六萬五千圓に更改すると共に工期を延長し、遂に昭和三年度に至つて完成を見たのである。

以上により大正四年工事中止の際未成工事として残された繫船岸の中、第一繫船岸は委託工事を以て大正十五年三月竣功し、今又第一、第三突堤の完成により第二、第六、第七の各繫船岸の竣功を見るに至り、從來不備不足を免れなかつた繫船荷役設備は

茲に漸く充實することゝなつた。

之より先、第一、第三突堤の上屋及び起重機等陸上設備並に曳船二隻を工費豫算二百五十七萬圓を以て建造するの計畫を樹て、昭和元年度に着手し昭和三年度を以て大部分の完成を見たが本工費に對しては、百二十萬圓の國庫補助を受けることゝなつた。他方鐵道省施行の臨港鐵道敷設工事は、埋立地内工事費を本市負擔とし豫て工事中であつたが、昭和三年十二月竣功開通を告げた。斯くて從來本港に不備であつた繫船岸と上屋其の他陸上設備並に臨港鐵道の三者が相踵いで竣工し、市民の多年翹望して止まなかつた海陸運輸連絡が完全に達成せられ、世界的商港たるの實を具備するに至つた。

## 六 施 設 の 現 況

第一次の築港工事は以上を以て終つたが、本市に於ては此の間又別途に各般施設の擴張改良を行ひ、更に後述の如く第一次築港工事に引續き第二次修築計畫に屬する諸施設の實現に力を注いでゐるが、斯くして出來上つた港灣施設は昭和九年末に於て概要左の如くである。

防波堤及港内水面積——南、北及び内港の各防波堤の合計延長は八千六百八十餘米で、外に鶴



濱通地先波除堤四百五十餘米がある。右防波堤によつて抱擁せらるゝ港内水面積は約六百五十五萬平方米であつて此の中四百四十五萬五千方米は九米以上(平均潮望干潮面下、以下之に同じ)の水深を有する。

航路標識——南、北防波堤の各先端に官設燈臺一基宛ある外、市設としては木津川尻沖合新設防波堤並に大棧橋先端に燈臺各一基、鶴濱通地先船溜波除堤に燈竿二基及び第一、第三突堤地先に桂燈浮標三個を設置して居る。

繫船浮標——南一番乃至二十四番、北一番乃至五番及び番外一の合計三十隻分があり、其の繫船能力は、番外浮標の四千噸級を除き、其の他は五千噸級乃至二萬噸級の數種に分れてゐる。

棧橋及繫船岸——水深九米以上のものは、大棧橋、第一、第二、第六、第七の各繫船岸、櫻島棧橋、梅町棧橋、梅町船渠西岸の八ヶ所であつて、此の延長は二千九百餘米である。又水深七・五米未満のものは、天保山棧橋、第八繫船岸、鐵道棧橋、櫻島片棧橋、梅町船渠北岸、尻無南繫船岸の六ヶ所であつて此の延長は一千五百二十餘米、合計十四ヶ所延長計四千四百二十餘米に上つてゐる。以上の中大棧橋、天保山棧橋、櫻島棧橋及櫻島片棧橋の四箇は、大正十一年以前の築造に係り、爾餘の十箇は孰れも昭和元年以降九年迄の間に完成したものである。尙ほ梅町船渠西岸

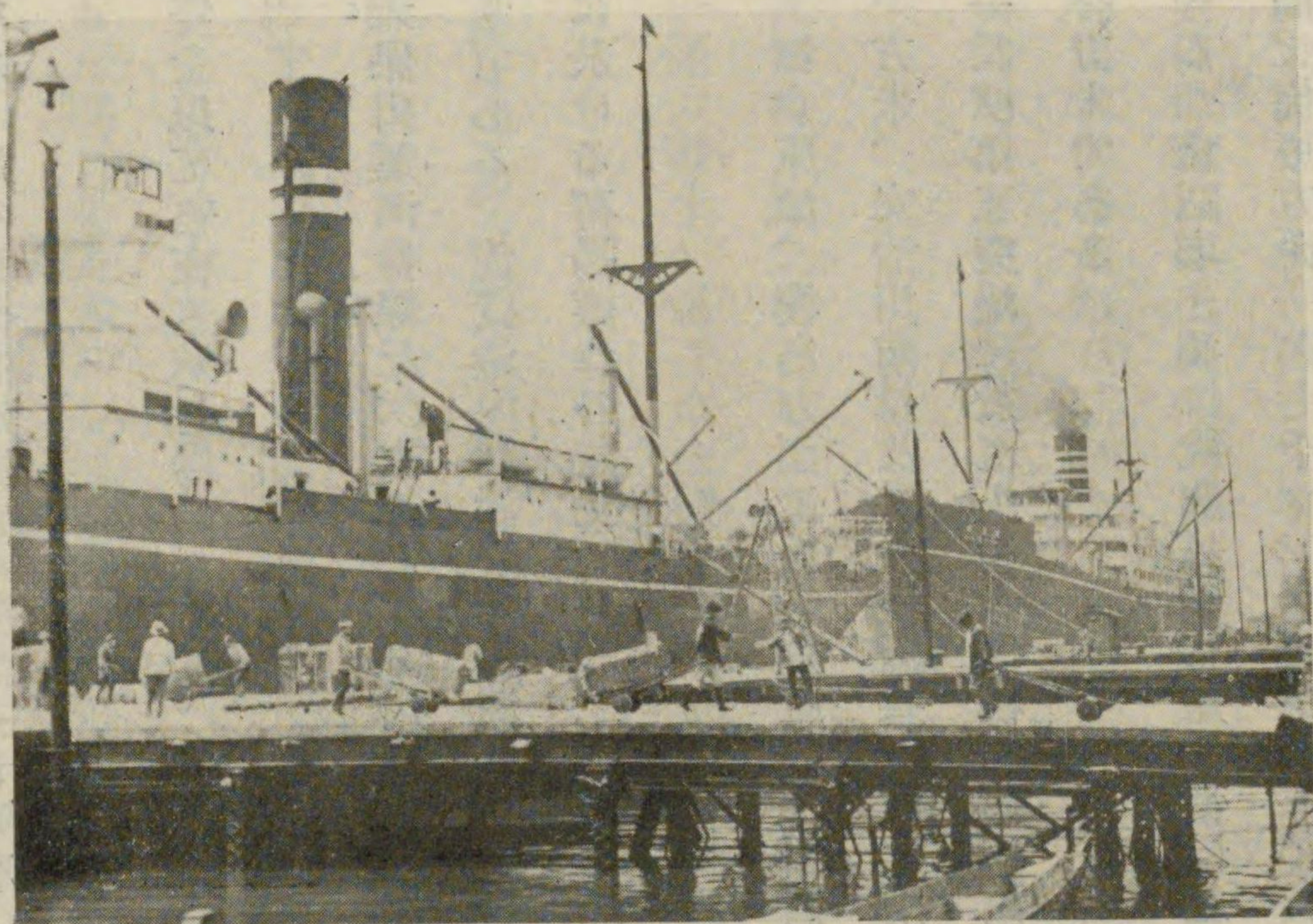
は最近竣功し、目下陸上設備工事中である。

曳船及綱取——船舶の棧橋繫離、港内轉錨及び荷役船曳引の需めに應ずる爲め、大型曳船神崎丸及び大和丸の二隻を備へて之に充て、必要の際には給水船等小型船を以て之に充てゝゐる。尙ほ右大型曳船には夫々消火及び海難救助に關する設備を施し、港内警備の用にも供してゐる。又市は船舶の棧橋繫離に要する綱取作業並に船舶塵芥搬出作業をも營んでゐる。

船舶給水——各棧橋、繫船岸に設置せる給水栓七十九個を以て繫留船の需めに應じ、尙ほ沖懸り船の爲めには唧筒付小蒸汽船四隻及び附屬水槽船六隻を備へ、運搬給水の需めに應じてゐる。

木材整理場——輸移入木材の一時假置整理等の

施設の現況



櫻島棧橋



便に供する爲め港内に木材整理場三ヶ所を設置してゐる。此の繫留柵延長計一千百三十餘米、面積計十一萬五千四百平方米である。

渡 船——天保山、櫻島間渡船は石油發動機船四隻を以て終夜運轉を爲してゐる。従前賃料を徴収してゐたが、昭和二年四月以降は無料となつた。

運河、船溜及荷揚護岸——築港埋立地内運河は、天保山運河幹線及び支線、木津川運河、福町堀及び千歳運河であつて、此の延長七千二百七十餘米である。尙ほ港内に設置の船溜場は三ヶ所であつて、面積五萬八千五百五十餘平方米、港内沿岸に於ける荷揚護岸の延長は合計二千七百餘米である。

上屋及倉庫——海陸聯絡設備として施設した市設上屋倉庫は、櫻島方面に於て倉庫二棟面積四千五百八十餘平方米、上屋四棟面積一萬三百五十餘平方米、安治川南岸及び大棧橋基部南北兩側に於て上屋八棟面積一萬二千六百五十餘平方米、第一及び第三突堤に於て上屋十二棟面積二萬九千九十一平方米、合計二十六棟五萬六千六百七十餘平方米である。

保税地域——前記上屋の大部分は附近の土地岸壁等の一定區域と共に税關長の指定を受け之を保税地域として利用に供してゐるが、其の面積は櫻島、梅町方面一萬七千二百二十餘平方米、安治

川南岸及び大棧橋基部南北兩側に於て二萬五千二百四十餘平方米、第一、第三突堤に於て五萬八十餘平方米、合計九萬二千四百五十餘平方米である。外に北二號上屋の一部及び附近土地岸壁面積二千三百十餘平方米は之を保税工場として一般の利用に供してゐる。

荷揚場——港内沿岸に於て市設荷揚場として利用に供せるものは十ヶ所、此の間口合計一千餘米、面積計九千七百九十餘平方米である。

起重機——荷役の便に供する爲め設置せる市設起重機は、陸上機としては、一噸半自走式六臺、二噸半可動式二臺、三噸据置式二臺、卅五噸据置式一臺、計十一臺、水上機として十噸浮艇式一臺、二十噸浮艇式一臺の計二臺、合計十三臺である。

鐵 道——本港と後背地とを聯絡する鐵道は、西成線及び臨港線の二線があり、櫻島及び梅町方面の各埠頭は前者に、安治川以南尻無川以北の各埠頭は後者に接続し、船車の聯絡は至便である。飛行場——港南船町に大阪飛行場があり、面積約三十五萬平方米、尙ほ前面水域の利用により水上機の發着にも使用せらる。

築港埋立地——埋立地の總面積四百六十八萬九千五百四十平方米にして、内離權したものの六一萬六千九百五十平方米、公共使用地九十三萬二千六百七十餘平方米、無償使用地二十二萬八千



百六十餘平方米、賃貸地二百三十八萬九千九百四平方米に上り、尙ほ目下未使用のもの五十二萬一千八百四十餘平方米で、夫々港灣利用者の便に供せんとしてゐる。

## 七 第一次修築及復興計畫其他

**根本計畫の確立** 大阪港利用増進の趨勢は到底既成の設備を以て満足することを許さず、益々各種施設の擴張改善を促して止まない。茲に於て市は第一次築港工事の竣功に先ち、第二次修築の計を樹てることゝなつたが、之に就いては先づ以て局部的施設に依る不統一を防止する爲め、將來大阪港に於て施行せらるべき諸々の工事施設の基準となるべき根本計畫を樹立する必要があつた。そこで市は案を具して其の確定方を政府に申請し、政府に於ては昭和二年十二月之を臨時港灣調査會の審議に附して決定した。之が大阪港第二次修築計畫である。固より本計畫施設の全部を完成するのは、鉅億の資財と長期に亘る歳月を要するので、本市は市勢の發展と港灣利用の趨勢に順應し財政状態を考慮して其の急施を要するものから漸次之が實現を圖ることゝした。其の後港灣利用の趨勢其の他の事情に鑑み右計畫に多少變更を加ふるの必要が生じたのと、前に港灣調査會に於て將來港勢の發展に應じ考慮すべき旨決議せられた南港施設計畫の決定を必要とす

るに至つた爲め、本市は更に案を具して政府に申請し、昭和七年八月再度臨時港灣調査會の議を経て之が決定を見るに至つた。

**第二次築港工事**(第一期工事) 以上決定せられた第二次修築計畫の中、第二突堤築設其の他の施設を第一期事業として實施するものとし、工費豫算九百十六萬圓、工期六年の豫定を以て、昭和四年七月工事に着手し之に對し國庫補助下附方を稟請したところ、右の中修築工事に對し三百八十四萬二千圓を下付けられることゝなつた。其の後第二次修築計畫の更正並に財政上の都合等により、既定設計の追加變更を爲すと共に工期を昭和十一年度迄延長することゝなつた。即ち本計畫は錨地の擴張、繫船岸、荷揚場及び舢船溜の増設、木津川港内連絡並に船町の陸上連絡等の實現を期せんとするものである。而して第八繫船岸は昭和八年三月竣成、利用を開始した。

**北突堤外埋立並港灣設備** 櫻島既成埋立地は海陸連絡上主要地點を占むるも、利用増進に従ひ現在の施設に狹隘を告ぐるに至つたので、地先海面約五十一萬七千平方メートルを、工費豫算二百七十六萬圓、工期五ヶ年の豫定を以て埋立つる計畫を樹て、大正十三年三月工事に着手したが、其の後第二次修築計畫の決定に則り施行することゝなつたのと、又他方市財政上其の他の都合等により計畫を變更し、埋立總面積を五十六萬三千八百平方メートル、工事費を四百二十二萬五千圓、工期を





安治川に於ける船の輻輳

昭和十年度迄とした。而して本埋立区域の中第一區面積十八萬六千三百二十三平方米は昭和五年五月第二區面積十三萬七千四百五十六平方米は同年五月、第三區面積四萬四百七十一平方米は同年七月夫々埋立竣成を告げ、其の他は順次完成の豫定である。

尙ほ埋立の竣功に伴ひ其の前面に於ける繫船設備に關しては埋立地利用者と協定し、之が實現を期することとした。即ち左の如くである。

梅町棧橋——本棧橋の築造は港内淺水區域の浚渫と併せ行ふものとし、三井物産株式會社との特約により、工費豫算二百八十八萬圓を以て、昭和元年十月工事に着手し、昭和四年五月竣功した。

梅町船渠西岸繫船岸並北岸荷揚護岸——本埋立

地内に造成せらるべき船渠岸の中、西岸の一部延長五百十八米の區間に水深九米の繫船岸を、同北岸延長二百五十八米の區間に荷揚護岸を築造するものとし、南滿洲鐵道株式會社及び沖ノ山炭鑛株式會社との特約により、工費豫算二百四十四萬六千圓を以て昭和五年九月工事に着手し、後者は昭和七年五月、前者は同九年七月竣功した。

梅町船渠東岸繫船岸——同上船渠東岸の一部延長百七十五米の區間に水深二、三米乃至九米の繫船岸を築造するものとし、合同水産株式會社との特約により、工費豫算七十四萬圓を以て三年間に施行するものとし、昭和九年五月申請、目下當局に於て詮議中である。

南港町埋立 本市は夙に大都市に於ける飛行場施設の緊要なるを認め、當局と種々折衝を遂げた結果、本市船町埋立地を官に貸上げ、之と隣接官有地とを合せて、昭和三年三月初めて大阪飛行場の開設を見るに至つた。併し其の後の航空事業の發達に鑑み、更に大規模な飛行場を施設するの急務なる認め、當局に折衝研究を爲すところあり、遂に昭和六年十月之が移轉先の内定を受けたるを以て、工費豫算五百二十二萬圓、工期十ヶ年の豫定を以て住吉區地先海面約九十一萬五千平方メートルを埋立て其の敷地を造成するの計を樹て、昭和八年八月工事に着手した。之が南港町埋立である。

大阪港復興計畫 昭和九年九月二十一日の風水害に因り大阪港は多大なる被害を受けたが本市



は直ちに利用上の障碍を除去すると共に、一面本港が常に地方的商港たるに止まらず國家的重要港灣であり、又大大阪の生命線たるに鑑み、今次の被害対策は之を單なる復舊に止むることなく將來不幸天災重襲の際にも克く港灣の機能を保全すると共に、市民の生命、財産、生業を護り將來益々港都の繁榮を招來すべき百年の施設を爲すの必要を認め、大阪港復興計畫を樹立施行することとなつた。即ち之により風潮防禦の第一陣として強大なる外廓防波堤を構築する外在來防波堤の改造及び港内波除堤の築造、錨地の擴張、大棧橋の復興、繫船浮標の改良、貯木場及び小船溜の施設、其の他被害建物及び船艇類の復興等を實現せんとするものであつて、此の工費豫算總額二千萬圓、昭和九年度以降六ヶ年間に完成の豫定である。尙ほ之に對しては一千九十九萬四千餘圓の國庫補助を受くべく、市會の議決を経昭和九年十二月政府に申請を爲し、十年三月指令を得た。

**北港計畫**（民間施設） 第二次修築計畫中北港修築計畫は、正蓮寺川口を改修すると共に同川及び大阪築港連絡路を開き、船舶の出入を自在ならしめ、之により同川沿岸土地の利用増進に資せんとするものであつて、夙くより關係地主間に要望せられたが、大正八年十二月大阪北港株式會社が設立せられ、本企畫一切を繼承することとなり事業は著しく進捗し、遂に同會社は工費豫算一千百七十萬圓、工期十ヶ年の豫定を以て昭和六年五月工事に着手し、目下進捗中である。

## 餘 錄

### 一 學區廢止問題

#### 一 學區制の沿革

大阪市の學區制度は明治五年學制發布以來今日に至る迄の長い歴史を有して居り、其の可否に就いては多年の間盛んに論議せられたが、容易に解決し得ない面倒な問題であつた。其の間幾多の波瀾を経て漸く昭和二年に至り之が解決を見、僅に中等實業學校の二學區を残して他の六十七の學區が悉く廢止せらるゝに至つたのは、大阪市政にとつて寔に悦ばしいことであつた。

本問題が解決を見るに至つたのは、固より關係當局者の努力に負ふ所が多かつたとは云へ、大正十四年に行はれた市域擴張が其の氣運を醸成したことは争はれない事實である。従つて此の二問題の間には事實上不分離の關係があると云つても差支へない程深い因縁があり、而も市政史中に占める地位の重要さから觀ても何れとも輕重を附し難い大問題である。それ故に市域擴張誌の



餘録として、簡單ながらも學區問題を收め其の真相を傳ふることとする。

**沿革** 前述の如く大阪市に於ける學區制の起源は、明治五年の學制章程にある。同章程制定の年に、大阪市街町組地區を改正し、行政區域たる東大組を二十三區に、西大組を二十二區に、南大組を十四區に、北大組を二十區に計七十九區に分ち、每區に一小學校を設置せしめることとしたが、翌六年三月前年發布の學制に準據して小學區を制定し、第一中學區（東南大組）を三十四小學區、第二中學區（北西大組）を四十小學區、計七十四小學區に分ち、各小學區に一小學校を設置するの規定を設けた。之が大阪市學區制度の濫觴である。當時の學區事務は、戸長役場で取扱はれてゐた。其の執行機關たる戸長は民選であつたが、議決機關たる公選の區會の設けがなかつたから、當時の學區は未だ自治體をなしてゐなかつた。併し明治九年五月府は、小區にして會議を開かんとするものは、其の規則書を府に届出たる上會議を開くべしと命じてゐるので、之に依りて議事章程を定めた學區は既に自治體の素質を備へたものと見るべきであらう。

明治十三年に區域が改定せられて十五學區となり、同十七年には三十九學區となつた。明治十九年にはそれが從來の行政區たる東西南北の四區に統一せられて四學區となり、從來の小區會及び戸長役場を廢止し、議決機關としては大區會をして、又執行機關としては區長をして之に當らしめた。次いで明治二十二年特別市制が大阪市に施行せらるゝや、之と同時に學區は全廢せられ

大阪市が自ら小學校設置維持の費用負擔に任ずるに至つた。然るに明治二十三年の改正小學校令が學區制を認めたので、早晚學區制の復活せらるべきを見越し、復活せられる以上は速に其の區域を確定するを可とするの意見が出、明治二十四年市會は小學校設置負擔區劃を速に定められたき旨知事に建議した。茲に於て府知事は新小學校令に基く學區を設けることを大阪市に諮問したが、市會は曩の建議に拘らず學區設定に反對した。併し山田知事は市會の此の反對を無視し、明治二十五年三十九の尋常小學區を設置し、同二十六年から實施した。尋常小學校以外の學區は市町村が制定するの規程となつてゐたので、大阪市でも同二十五年に當時の行政區たる東西南北の四區を以て高等小學校の學區とし、其の後尋常小學校の學區に於て高等科、幼稚園、實業補習學校、裁縫學校の、又高等小學校の學區に於て實業補習學校、裁縫學校、中等實業學校の設置負擔に任ずることを定めた。尙ほ明治二十六年學區制再現以後に於ても學區數は屢々異動したが、重なる變動は明治三十年及び大正十四年の接近町村編入による増區である。即ち第一次編入に依りて二十一學區、第二次編入に依りて四學區（行政區單位のものなるを以て區域は非常に廣大であつた）を増加した。



## 二 學區制の弊害

**弊害の發生** 學區制は之に依つて、一小區域内の住民が自己の子弟の爲めに出来るだけ完全な教育施設を整へんとする情誼に訴へて、小學校の普及を圖らんとするにあつた。即ち學區内の住民の負擔を以て小學校を設置せしめることゝすれば、各學區が相競ふて學校を設置することゝなるので、小學校教育を速に普及するには寔に好都合であつた。大阪市では此の制度の結果、明治五年三月から同九年四月迄に、全學區に小學校設備の完成を告げるの好成绩を示した。それ故に當時にあつては、學區制度は小學校設置を奨勵する爲めの必要な制度であつた。

併しながら創設當時には必要であつた此の制度も時勢の變遷につれ、漸次弊害と不合理が續出し、遂に其の長所よりも弊害が却つて大きくなつた。今教育行政上の見地から其の弊害を擧げると次の通りであつた。

一、學區に依り教員の待遇に甚しい差等を生じ、之が教員の教育的精神に影響し、延いては兒童の精神にも惡影響を及ぼし、又高給を支出する學區に優良教員の集ることの避け難い爲め、學區に依つて教育の實質に差等を生ずる。



體操 場

二、學區制度は學校の設備上に甚だしい懸隔を生ぜしめる。即ち或る學區は完備した校舍を有つのに、他の學區は不完全な校舍の下に教育するの状態にある。又設備の狹隘な學區に於ては二部教授の如き不完全な制度の採用を餘儀なくせられる。之は延いて教育の實質に差等を生ぜしめることゝなる。

三、學區制は學區名譽職の教員への不當な干渉を多からしめ、又教育當局への干渉に依つて教職員に對する公平な措置を妨げる。

以上のやうな懸隔を生ぜしめたのは畢竟學區の負擔力に大きな相違があつた爲めである。即ち市の中央部には、商工業を主とする企業會社の設立年と共に多さを加へ、富裕階級も多く此處



に營業住居し、此等は何れも其の所在學區の區費(稅)を負擔し巨額の納稅を爲し得るに反し、周圍部は多く中産階級以下を以て占められ、而も中央部のやうに企業會社と富者の納稅が乏しいので、次表の如く中央部と周圍部の學區の間に、學區費の負擔能力に大なる差等を生ぜしめることゝなつた。

學區費(稅)本稅額調

稅目區別	國稅			府稅		
	宅地租 中央部學區	宅地租 周圍部學區	營業稅	所得稅	營業稅	雜種稅
明治四十年	一、三三三	一、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三
同四十二年	一、三三三	一、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三
同四十四年	一、三三三	一、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三
同四十六年	一、三三三	一、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三
同四十八年	一、三三三	一、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三
同五十年	一、三三三	一、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三
大正元年	一、三三三	一、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三
同二年	一、三三三	一、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三
同三年	一、三三三	一、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三
同四年	一、三三三	一、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三
同五年	一、三三三	一、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三

學區費(稅)賦課率調(本稅一圓ニ付)

稅目區別	國稅			府稅		
	宅地租 中央部學區	宅地租 周圍部學區	營業稅	所得稅	營業稅	雜種稅
明治四十年	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三
同四十二年	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三
同四十四年	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三
同四十六年	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三
同四十八年	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三
同五十年	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三
大正元年	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三
同二年	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三
同三年	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三
同四年	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三
同五年	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三



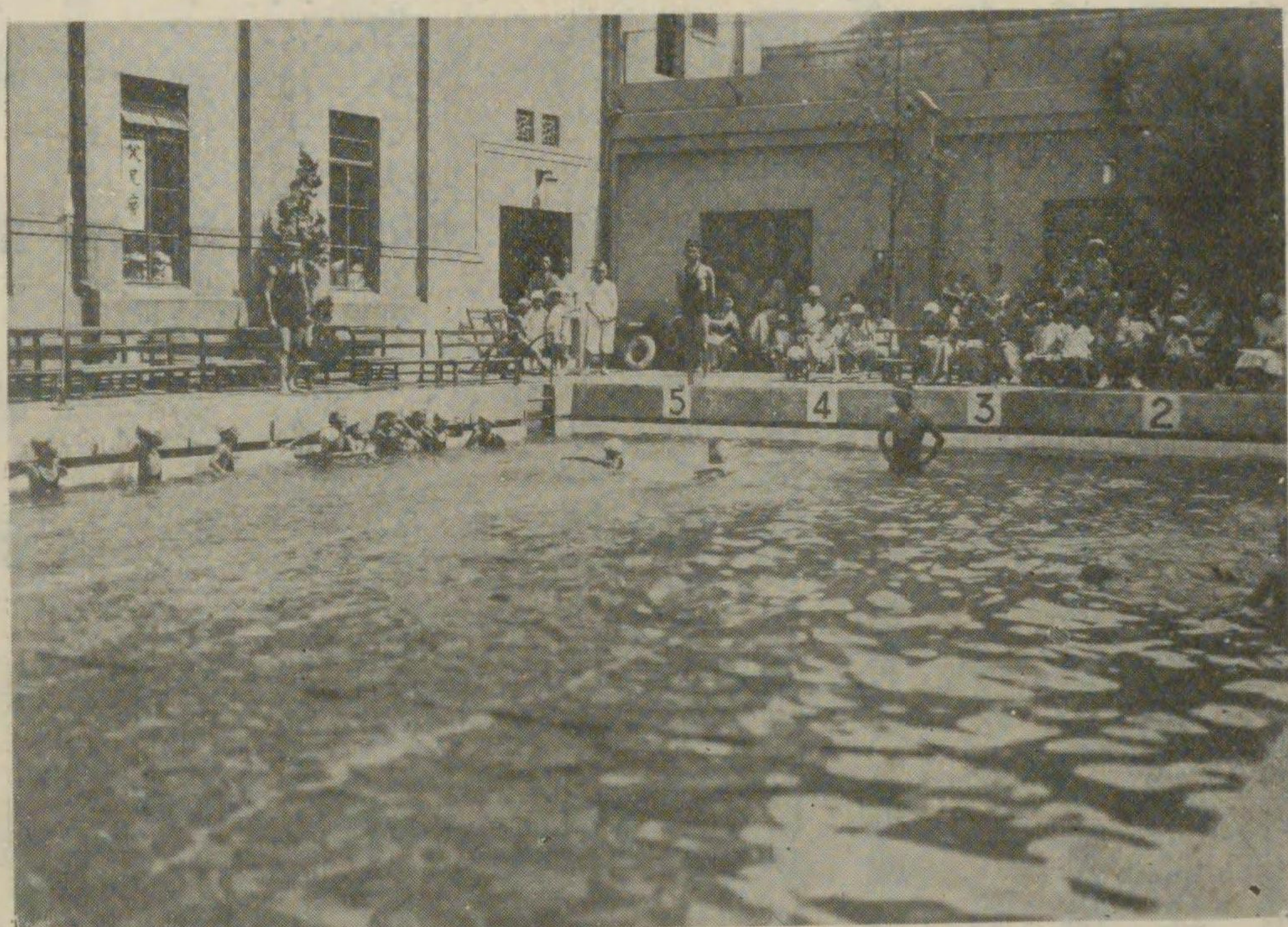




て周圍部の學校を建設し其の負債を償還するものであつて、其の結果は大阪市全體としての小學教育施設を低下せしめることゝなると云ふ理由で、府知事に對して強い反對を表明したからであつた。

### 三 弊害の緩和

**設備費の補助** 斯かる事情に依つて、此の問題は何時解決するか全く見當がつかなかつたが他方教育施設の不公平、負擔の不均衡は益々甚しくなるばかりであつたので、市當局も徒に拱手してゐる譯には行かず、當面の緩和策を講ぜねばならなくなつた。茲に於て市は大正七年市會から林大阪府知事に學區廢止の強硬な意見書



を提出すると共に、同年から同九年まで毎年二十萬圓を支出して貧弱學區に補助し、更に大正八年から十年まで三ヶ年間毎年百萬圓を支出し、そこで小學校を建築して之を貧弱學區に無償で貸與する等應急の處置によつて、周圍部學制の當面の設備問題は一段落を告ぐるに至つた。

**教員給の統一** 然るに設備が如何に完備しても教員に缺くる所があつては完全な教育は出來ない。故に教員の俸給諸給與だけでも市に統一し、周圍部教員の待遇を漸次改善し、優良教員を配置して、此の方面に於ける機會を均等にせよとの議が起つて來た。併しそれには先づ法令の改正を要するので之が地方學事通則改正の建議となつて現れ、其の結果同則第三條「學區ニ於テ専ラ使用スル學校幼稚園ニ關スル費用ハ其ノ學區内ニ於テ市町村稅ヲ納ムル義務アル者之ヲ負擔ス」と云ふ條文に「特別ノ事情アル場合ニ於テハ前項ノ規定ニ拘ラズ監督官廳ノ許可ヲ受ケ市町村ニ於テ其費用ノ一部ヲ負擔スルコトヲ得」との一項を加へることに改正された。此の改正の結果大阪市は、大正十年度から學區經費の過半を占むる教員保母の俸給及び諸給與を市費支辨に移し、同時に學區費に對する市の補助を廢することゝし、此の教員俸給及び諸給與の市費支辨を實施するに當つては從來學區費の財源となつてゐた地租、營業稅、所得稅、家屋稅、營業稅、雜種稅の各附加稅中家屋稅附加稅のみを學區の財源として殘し、他は總て之を市費の財源に引上げること



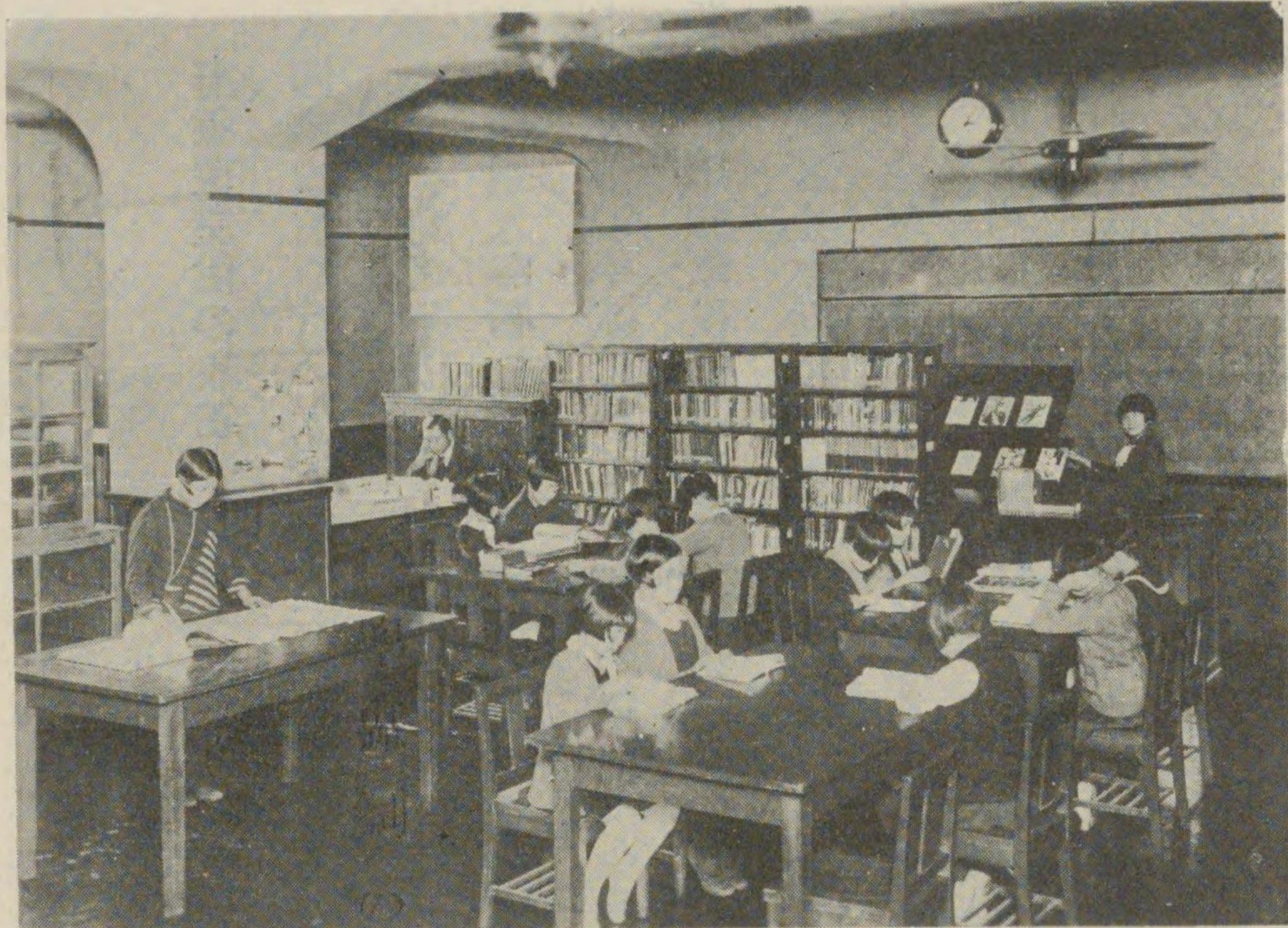
した。其の結果學區税の課率は次の通り變化を見ることゝなつた。

教員給統一前後の學區費(税)賦課率最高最低調

税目	教員給統一前					教員給統一後				
	大正五年	同六年	同七年	同八年	同九年	同十年	同十一年	同十二年	同十三年	同十四年
國稅										
附稅										
加稅										
所得稅	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇
營業稅	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇
宅地外房租	〇・二〇	〇・二〇	〇・二〇	〇・二〇	〇・二〇	〇・二〇	〇・二〇	〇・二〇	〇・二〇	〇・二〇
宅地租(最高)	〇・九〇	〇・九〇	〇・九〇	〇・九〇	〇・九〇	〇・九〇	〇・九〇	〇・九〇	〇・九〇	〇・九〇
宅地租(最低)	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇
府稅										
營業稅	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇
家屋稅	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇

教員給統一後の學區

併し問題は之で解決した譯ではない。多數の學區は負擔能力に著しい差等があるので其の後も自然設備費及び俸給諸給與以外の經常費の支辨に當り、尙ほ負擔の不均衡、施設の不調和を免れなかつた。即ち周圍部にあつては中央部に比し兒童數の増加が多い爲め、年々學校増築の必要を生ずるのに、之に充當すべき財源が伴はない。殊に周圍部の人口増加は主として中産階級以下に屬するものであるから、其の家屋も等級低く、從て急激に増加する學校増築費に必要な税額は到底得られず、借入金に依るも其の償還の途がないので、勢ひ充分な設備計畫を樹てることが出来なかつた。それ故に益々不完全な校舎の下に二部教授を行はねばならぬ状態に陥つた。之に反して中央部の學區は學校増設の必要がない上に、税源は年々膨脹の傾向にあるから、左程課率を増さなくとも充分な税額を擧げ得るので相競ふて堂々たる近代的な校舎に改築するの状态であつた。それが爲め教員給の統一後に於ても、依然學區廢止論が繰返されてゐた。



兒童文庫



### 四 學區廢止の實施

**府稅家屋稅の改正** 然るに端なくも茲に學區廢止の機運は熟して來た。それは即ち接近町村編入問題であつた。大阪市は大正十一年に市域變更調査會を設けて調査する所があつたが、關係町村は殆んど全部學區制度撤廢を合併同意の條件とするの有様であつた。茲に於て學區問題は市域擴張問題と關聯して、新なる勢を以て再燃して來た。當時關市長は勿論中川知事も之に賛し、又市中央部の學區に於ても時勢の變遷につれて學區廢止の必要を認むるに至つたので、此の問題は從來に比し餘程順調に運ばれることゝなつた。それ故に市當局としては、接續二郡の編入と同時に學區廢止を斷行すべきことを期待してゐたが、其の前提として先づ府稅家屋稅を改正せねばならなかつたので、之が解決を見るまで一時廢止を延期することゝし、差し當り編入に依る市新域には西淀川、東淀川、住吉、東成、西成の各行政區を區域とする五學區を設けることゝした。其の後府に於ても調査を進め、從來家屋稅の課稅標準は道路標準主義を採つてゐたのを賃貸價格主義に改めることゝし、負擔の激變を避くる爲め之に多少の手加減を加へて、大正十五年度から家屋稅の改正を實施した。茲に於て先づ前提問題の解決を見た譯であるが學區廢止直前の學區の狀態を見るに次の通りであつた。

學區に於ける學校幼稚園調 (大正十五年四月)

中央部 中間部 周圍部 全市	小學校		幼稚園		補習及裁縫學校		中等實業學校				
	校數	學級數	園數	組數	幼兒數	校數	學級數	生徒數	校數	學級數	生徒數
中央部	四	九二	四	二七	三	二六	三	二、七六	—	—	—
中間部	三	一、九六	五	四七	三	一、九三	五	六、三五	—	—	—
周圍部	八	一、七〇	八	六六	四	一、七二	七	一、〇三	—	—	—
全市	一五	四、六七	一七	一三〇	一一	四、九一	一八	一四、一〇	—	—	—

小學校調 (大正十五年四月)

尋常科一學級當兒童數	學級編制		二部教授		小學校經常費	
	校數	學級數	校數	學級數	兒童數	兒童一人當
中央部	二	五〇	二	五	三〇五	一四・六八
中間部	一	五〇	一	五	一六	八・六二
周圍部	三	五〇	三	一五	一〇五	一・五九
全市	六	一五〇	六	二五	三二六	一五・〇元

學區歲入出豫算 (大正十五年度)



餘 錄		稅 外 收 入		計 合 計	
(市 稅) 財產收入	56,446 円	繰越金	1,777,000 円	雜收入	3,321 円
授業料保育料	56,446 円	交付金	1,777,000 円	財產賣却代	5,426 円
歳 出 (經常部)		共通費	1,777,000 円	管理費	3,321 円
會議費	1,110 円	幼稚園費	1,777,000 円	雜支出	7,707 円
學務委員會費	1,110 円	共通費	1,777,000 円	豫備費	5,426 円
基本財産費	3,321 円	學齡調查費	4,426 円	其他	5,426 円
小學校費	3,321 円	學齡調查費	4,426 円	合計	10,170 円
歳 出 (臨時部)		積立金	6,641 円		
設備費		其他	6,641 円		
小學校	3,321 円	合計	13,117 円		
幼稚園	3,321 円				
納付金	3,321 円				
青年團教育會	3,321 円				
補助金					
土地建物	71,321,663 円				
圖書器具	4,507,930 円				
基本財産積立金	7,707,661 円				
計	79,537,254 円				
負債額	1,815,568 円				
學區財產及負債 (大正十五年)					

學校施設の増改築計畫 學區の廢止は普通教育の機會均等を目的とするものであつたから、廢止後に於ては不完全なる周圍部の學校施設を充足して行かねばならなかつた。茲に於て學區廢止

後二十ヶ年間に一通り其の施設を整頓せんと希望の下に毎年六千人の兒童が増加するものとして、昭和二年度から昭和二十一年度迄に二千四百學級を新設し、二千二百餘學級を改築し(内三百二十學級は學區の既定計畫に依るもの) 又幼稚園二百を新設するの計畫を樹てた。而して之に要する經費として、小學校増改築費約六千六百餘萬圓、幼稚園新設費七百萬圓、高等小學校設備改善費十萬圓、學區負債償還費約三千六百六十餘萬圓、經常費其他約八千五百餘萬圓、總額約一億九千五百七十餘萬圓を必要とした。而して教員給統一後學區廢止前に於ける學區負擔の費用は、家屋稅附加税を主たるものとし、外に財産收入、舊建物の賣却代、授業料其他の稅外收入を以て賄つてゐたから、學區廢止後も之を踏襲することとし、又家屋稅附加税の平均課率は約四圓となつてゐたのを統一後の施設を急ぐ爲め、之を四圓五十錢に引上げることとし、又家屋稅の本稅額が年々五萬圓増加するものと見て之に依る自然増収を見込み、二十ヶ年間に約一億八千四百十五萬圓を收入し得るものと推定し、之に不動産賣却代、授業料手数料等の稅外收入約七百八十萬圓を加へた總額一億九千五百七十餘萬圓を以て、前述の二十ヶ年計畫に依る經費を賄ふと云ふ財政計畫を樹てたのであつた。學區から引繼いだ負債の償還に就いては當時問題となつたが、他日適當な機會に長期公債に借換へると云ふ方針を採ることとなつた。



**廢止の斷行** 斯くして學區廢止の準備が全く整つたので愈々之が實施の爲め手續を開始した即ち大阪府知事は大正十五年九月學區廢止及び之に伴ふ財産處分の諮問を大阪市及び六十五の學區に發した。茲に於て市會は之を議員全員を以て組織する委員會に附託し、回を重ねること六回、慎重審議の結果十月二十七日大多數（九十名中十二名反對）を以て異議なき旨を可決し、直に其の旨を答申した。尤もそれには學區の區會議員及び區學務委員に代るべき適當な機關を設置すること、及び學區廢止の當時に於ける家屋稅附加稅の賦課率を其の平均額より成るべく増加しないことの二條件が附せられてあつた。又各學區に於ても夫々審議を重ねたが、大勢の趨



理 科 準 備 室

く所を洞察し賛意を表するもの續出し、結局反對十七に對し四十八の賛成答申を見るに至つた。依て府知事は愈々斷行の決意を爲し、十一月十一日付を以て大正十六年三月末日限り大阪市の六十五學區を廢止し、學區の財産及び負債は大正十六年三月三十一日現在に依り大阪市の歸屬する旨を公示した。又大阪市も之に伴ひ、同日付を以て南北の兩大區（高等小學校學區）を同様に廢止の旨告示をした。斯くて大阪市の學區は中等實業學校學區たる東西二大區を残すのみとなり、多年の大懸案は茲に目出度く解決を告ぐるに至つたのである。此の大問題が圓滿に解決を見たのは第二次市域擴張が其の機運を促進せしめたのではあるが、之を斷行するに當つて關市長はじめ、府市及び學區關係者の努力は多謝すべきである。

## 二 風 水 害 概 況

### 一 概 説

昭和九年九月二十一日午前七時五十五分、氣壓七一五・八耗、風速六十秒米と云ふ内陸地方としては未曾有の大颱風の爲め、大阪灣を中心とする近畿地方一帯は實に悲惨なる大災害を蒙つた



本市の如きも、半時間にして文化的施設の機能を破壊せられ、電燈は點せず、水道は停止し、動力は不足し、通信交通の機關も亦杜絶して人心を極度に不安ならしめた。殊に颱風は高潮を呼んで防波堤の決潰、家屋建造物の倒壊流失、人畜の死傷、樹木の損傷、工場生産力の停止等實に甚大なる損害を齎した。就中數多小學校舎の倒壊に依つて學童の夥しき死傷者を出したのは誠に傷心の極みである。本市面積の約三割を占むる浸水地區の大半は濁水が容易に去らないので、食糧衣類の配給が遅延して物資漸く欠乏し、災後の風雨は病疫を齎すなど、罹災者の痛苦は洵に言語に絶するものがあり、かの關東大震災に次ぐの大悲慘事であつた。

**颱風及高潮** 颱風の進路及び發達に就いて見るに、九月二十日夜半宮崎の南東約百軒の海上より北東の針路を取り、一時間六十乃至七十軒の速度を以て進行した颱風は、二十一日午前五時室戸岬に、六時には徳島の近海に來り、七時洲本の北方を通過しつゝ、九時琵琶湖上に出で、更に北東に進行したのである。

九月二十一日午前六時、本市に於ては風速六米四の稍疾風程度に過ぎなかつたが、七時には十二米八の強風となり、七時四十分には十八米七の烈風と化し、八時に至り風速二十九米八の最強の状態(颶風)に達した。八時三分には遂に風力計を吹き飛ばしたので、風壓計によつて測定する



築港三條大通の慘害

と、風速の最大は六十米を示した。午前九時に至り二十米に下り、其の後漸次風力が衰へて午後二時には四米六の和風程度に下降した。

次に氣壓は九月二十日夜半頃より漸次下降し、二十一日午前六時には氣味の悪い程の下降を示して七百三十一耗となり、七時五十五分には七百十五耗八の最低を示した。其の後約五、六分間は其の間を昇降し、八時十分より漸次昂騰した。

以上の経過を以て發達し來れる颶風に伴つて高潮が襲來し、其の水位は大阪港内に於て最も高く、二十一日午前七時四十分には築港の人道を濡す程度であつたが、八時には〇・八二米、八時十四分には二・二二米の最高に達した。同時刻天保山棧橋に建設中の大阪測候所檢潮所壁面に印した最高は、五・一米



(室内床上二・四米)に達し、最大増高は一分間に〇・〇二四米を示した。併し八時二十分頃より漸次退き、九時には人道上〇・八七米、十時には〇・四一米、午後五時四十分には全く退いたのである。

**浸水區域** 浸水した區域は此花區、港區、大正區の殆んど全部、浪速區、西成區、住吉區、西淀川區及び東淀川區の一部である。其の面積は約四千九百萬平方米、之を本市全面積約一億八千五百萬平方米に對比すれば實に其の二十六%に當つてゐる。就中此花、港、大正の三區を初めとして西淀川、西成、住吉各區の一部は瞬時にして海水及び濁水の侵すところとなり、浸水の多きは地上八、九尺に上る。其の他の區に於ても相當の床上浸水を見るなど至るところ泥海と化するの慘狀を呈した。

市内浸水面積調

區名	全面積	浸水面積	區名	全面積	浸水面積
	平方米	平方米		平方米	平方米
港區	九、三八〇、七〇六	九、三八〇、七〇六	西淀川區	一六、八九三、一八一	六、九二九、〇八九
此花區	二、三四七、一四一	二、三四七、一四一	浪速區	三、七九四、一三三	五三、一五二
大正區	九、一三三、四九九	九、一三三、四九九	西區	四、二五六、八九八	八四三、四〇〇
住吉區	三、九四四、七五五	八、八九九、二三三	東淀川區	三三、一三〇、五七七	一〇五、六九五
西成區	六、九〇〇、三九九	二、三四五、二九九	計	二四、七〇〇、〇五六	四九、三三六、四五一

次に大阪府工場課調査に係る浸水地域の滞水日數を、各區別に列舉せば左の如くである。

區名	四日以上	二日以上	一日
港區	千代見町、辨天町、市岡元町一帯	南市岡、福崎町川岸、壽町、湊屋町、石田町、八幡屋町、入舟町、磯路町、新池田町、八雲町	福崎西ノ町、天保山、築港棧橋一帯、九條
此花區	西九條、春日出町、秀野町、島屋町の各一部	上記各町、高見町、大開町、兼平町、恩貴島町	北港、櫻島、川岸町、大開町、豊崎町、中津
大正區	平尾町	泉尾、三軒家附近	船町、鶴町、福町、北恩加島町、泉尾濱通、小林町、泉尾北村町、千島町、南恩加島町
住吉區	北加賀島町、嬰木町、平林北ノ町全部	住ノ江公園、平林南ノ町、北島町全部	上記各町川邊地域、北西島町、姫島町、野里町、南島町、浦江町、御幣島町、蒲島町、海老江町
西成區	布屋町、西島町、矢倉町、大和田町、出来島町の各一部	津守一帯にして住吉堤防と木津川に挟まれたる川岸地域	櫻川町、木津川町、西濱、荻原町一帯
西淀川區	和野町、百島町、中島町、佃町、西洲町	反物町、荻原町附近	本田、南堀江、北堀江、新町、阿波座、靱、松島の各一部及河川の沿岸地域
浪速區			
西區			

罹災家屋及罹災者

颶風及び高潮は須臾にして幾多の生命を奪ひ、多數家屋、學校其の他の建造物を倒壊するなど、戦慄すべき状態を現出した。其の慘狀を數字を以て表示すれば、死者九百



九十名、重傷者二千九百九十五名、家屋の全壊流失一千一百四十一戸、半壊半流三千九十六戸、床上浸水十萬一千六百九十九戸、船舶の全壊流失七百二十七艘、半壊五百一十一艘と云ふ驚くべき實情であり、更に之を區別に示せば左の如くであつた。

罹災家屋數調

區名	全壊、流失	半壊、半流	床上浸水	區名	全壊、流失	半壊、半流	床上浸水
北區	△ <sub>世帯</sub> 二〇六	△ <sub>世帯</sub> 二六六	九	浪速區	△ <sub>世帯</sub> 二	△ <sub>世帯</sub> 八〇	一、六七
此花區	△ <sub>世帯</sub> 四三三	△ <sub>世帯</sub> 五〇四	一九、九〇	西淀川區	△ <sub>世帯</sub> 一三	△ <sub>世帯</sub> 三九五	九三六
東區	△ <sub>世帯</sub> 一六	△ <sub>世帯</sub> 一〇	一	東淀川區	△ <sub>世帯</sub> 一三	△ <sub>世帯</sub> 四六二	一〇六
西區	△ <sub>世帯</sub> 一四	△ <sub>世帯</sub> 九	二、七四	東成區	△ <sub>世帯</sub> 一	△ <sub>世帯</sub> 一五	二八
港區	△ <sub>世帯</sub> 三三五	△ <sub>世帯</sub> 五九二	四、七三	旭區	△ <sub>世帯</sub> 七	△ <sub>世帯</sub> 二三三	八元
大正區	△ <sub>世帯</sub> 二八	△ <sub>世帯</sub> 五七	一九、四七	住吉區	△ <sub>世帯</sub> 九	△ <sub>世帯</sub> 三五	一、〇九
天王寺區	△ <sub>世帯</sub> 一	△ <sub>世帯</sub> 一〇	二	西成區	△ <sub>世帯</sub> 三	△ <sub>世帯</sub> 一九五	二、八七
南區	△ <sub>世帯</sub> 一三	△ <sub>世帯</sub> 一	七	計	△ <sub>世帯</sub> 一八六	△ <sub>世帯</sub> 三、六〇七	一〇、九八
備考	△印は船舶の罹災を示すものである						

罹災者數調

區名	死亡	重傷	區名	死亡	重傷
北區	三人	五八人	浪速區	二人	三七人
此花區	二五六	六一一	西淀川區	二四三	五〇五
東區	一八	五三	東淀川區	三二	一五五
西區	二	二八	東成區	一〇六	二六九
港區	六九	九九五	旭區	六三	一五四
大正區	一一一	四六七	住吉區	四七	三〇一
天王寺區	一九	八八	西成區	一八	二四〇
南區	一	三四	計	九九〇	三、九九五

二 被 害

本市公營物の被害

風水害に因る本市公營物の被害も甚大であつた。就中、學校舎及び幼稚園舎の倒壊大破により多數児童及び教職員の犠牲者を出したのは、今次災害に於ける最大の悲惨事であつた。其の他港灣設備の根本的破壊は發展途上にある産業上に少なからぬ損害を加へたのである。電燈、電力設備の破損、電車、道路、橋梁の浸水大破、上下水道、市場、病院、住宅、塵芥處理場、葬儀所の倒壊浸水等は市民の日常生活を脅したばかりでなく、産業、通信、交通、保



健等に多大の打撃を與へた。本市公營物の被害の概要は左記の通りである。

教育施設		被害學校及幼稚園舎數	
小學校	幼稚園	中學校	計
全 壞 三	壞 四	中學校 五	計 七
半 壞 七	壞 四	一	共 七
大 破 七	三	六	一〇六
計 一七六	三	三	二九
兒童死傷數		兒童死傷數	
死亡	重傷	輕傷	計
校內 二五八	二七九	一、〇〇九	一、五五八
校外 一八	四	五三	六〇四
計 二六九	二八二	一、五五二	二、四二三
教職員死傷數		教職員死傷數	
死亡	重傷	輕傷	計
校內 九	三	六	一八
校外 一	一	三	四
計 九	二四	一〇九	一三三



江第三小學校の倒壊

港 灣 施 設

棧 橋—延長四五米ノ三分ノ二大破  
防 波 堤—南北及び内港防波堤上置コンクリート方塊  
數千個轉落  
埋立地護岸—延長三、五〇〇米崩壞  
繫船浮標—一個位置移動

土 木 施 設

道 路—アスファルト鋪裝道路三三〇平方米損壞、  
簡易鋪裝道路八七、二五〇平方米損壞、木塊  
鋪裝道路二八、八〇二平方米浮上、砂利道路  
六六一、四八三平方米損壞  
街 路 樹—一八、〇〇〇本折損、内七、〇〇〇本枯死

電 車 電 燈 自 動 車

發 電 所—二ヶ所浸水破壞  
變 電 所—二八ヶ所損壞  
送 電 線—鐵塔一六塔折損  
配 電 線—電柱二、一五三本折損傾斜倒壞流失斷線九  
二一線

風 水 害 概 況

船 艇—一〇隻沈没、三隻坐礁、四〇隻陸上打揚、  
約五〇隻大破

上屋及倉庫—大棧橋上屋一棟流失、三棟倒壞、五棟半壞  
起 重 機—數臺破損  
殉 職 者—一三名死亡、二名行衛不明

橋 梁—三橋流失、二橋大破、二三八橋小破  
河 川—一五六米堤防決潰  
渡 船—機械船五隻流失、同二〇隻浸水、手漕船二  
四隻流失、同二三隻破損、二名死亡  
公 園—三二公團建物、工作物、樹木損害

電車車輛—三二五臺浸水破損  
軌 道—一二線故障(二八、〇四八米)五專用橋梁破  
損  
電 線—六二、五〇〇米故障  
乘合自動車—二臺顛覆大破、二三臺浸水



上 下 水 道

上 水 道—淨水場ポンプ室其他建物、柵垣倒壊破損、水管橋三ヶ所墜落破損、配水管、制水弁、防

産 業 施 設

公 會 堂—中央公會堂小破、天王寺公會堂大破  
公 設 市 場—四七ヶ所小破、八ヶ所浸水  
卸 賣 市 場—機械器具浸水、棧橋上屋、杭、材木置場倒壊

保 健 施 設

塵芥處理場—一ヶ所機械浸水使用不能、二ヶ所破損  
塵芥汚泥運漕船—三二隻流失沈没、二八隻大破、一〇九隻  
屠 場—二ヶ所浸水大破  
消 毒 隔 離 所—浸水大破

小 破 損

葬 儀 所—二ヶ所浸水大破、七ヶ所小破損  
病 院—一ヶ所三病棟倒壊大破、分院一ヶ所半倒壊  
胞 衣 污 物 焼 却 消 毒 場—一ヶ所浸水大破  
浸 水

社 會 施 設

市 營 住 宅—一三戸全壊、五二戸半壊、浸水多數  
託 兒 所—三ヶ所浸水  
職 業 紹 介 所—一ヶ所倒壊流失  
共 同 宿 泊 所—一ヶ所浸水小破

産業の被害 産業關係の被害に就き大阪府の調査するところに依れば、被害の甚しかつたのは

港、大正、此花三區の西大阪方面で風害よりも寧ろ水害による被害が其の大部分を占めてゐる。

商 業

小 賣 店—二萬七千店、店舗浸水損傷、商品及び帳簿の浸水、總被害額二千七百萬圓  
倉 庫—築港櫻島方面の倉庫は殆んど全滅、建物損害三十萬圓、棉花綿糸三千萬圓、米穀二千萬圓、總被害額一億圓  
貿 易—在庫輸出入商品、沈没破損船舶の損害額未詳なるも甚大なる見込

工 業

小 賣 市 場—公設八、私設七十、水害損害二百三十三萬圓、公設四十六、私設百二十、風害損害三十五萬圓

災害による經濟的被害中最も重視すべきは工業方面の損害で特に工場の被害は頗る大きい。家屋、煙突の倒壊浸水、原料製品の損失、従業員の死傷者多く、又浸水による諸機械其の他設備に大なる損害を與へた。夫れが爲め一時生産停止の餘儀なきに立ち至つたものが多い。被害の大なるものは港、大正、此花、西淀川の四區に於ける工場で、該地域は大工業地である關係上、此の方面の損害は特に注目し得る。尙ほ工業方面の被害中見逃すべからざるものは再起し得ない中小工業者の生じたことである

市 内 工 場 被 害 調 査

種 別	被 害 調 査		種 別	被 害 調 査	
	工場數	倒壊家屋		工場數	倒壊家屋
染 織 工 場	三三	四三棟	雜 工 場	二九	三三棟
機 械 及 器 具 工 場	三五六	九四	特 別 工 場	二六	二六
化 學 工 場	二六六	六〇	計	三五	二、四〇〇
飲 食 物 工 場	七	三			一、八一
風 水 害 概 況					九九一



農 業

農 地二千三百四町步被害、内三百十八町步高潮浸水  
 農 作 物―被害額約七十六萬圓  
 家畜、家禽―家畜、家禽被害額約四十二萬圓、斃死流失の損害約九萬圓  
 農舎、農具―農舎全壞二百九十戸、流失農具被害額二萬四千圓

漁 業

漁 船―三百二十隻全損分損、被害額約一萬七千三百圓  
 漁 具―流失破損被害額約三萬九千七百圓

電 力

各機關に送電せる宇治川電氣、大同電力、日本電力各會社の發電所及び變電所は浸水により發電能力を失ひ又送電線及び電柱にして風害により破壊したものが多かつた爲め送電は一時全く不可能となつた前記三會社の被害概況を掲ぐれば左の如くである

會社名	浸水發電所數	浸水變電所數	破壊電柱	損害見積額
宇治川電氣會社	二	八	九六基	約三〇萬圓
大同電力會社	一	二	三〇	七萬圓
日本電力會社	四	不明	二〇〇	一〇萬圓

瓦 斯

大阪市及び大阪近郊に瓦斯の供給をしてゐる大阪瓦斯株式會社及び浪速瓦斯株式會社の被害は左の如くである

大阪瓦斯株式會社―岩崎町工場、舍密工場の建物機械裝置の破損  
 其の他瓦斯供給設備、營業所及び供給所關係等の被害約四萬七千圓  
 浪速瓦斯株式會社―瓦斯製造所内發生室其他建物、各供給所社宅及び倉庫、千船大橋架管流失、需要家倒壞家屋内設備瓦斯管及び出張所建物の被害約五千餘圓

**交通及通信機關の被害** 其の被害狀況の概要は左記の通りである。

省 營 鐵 道

大阪鐵道局管内に於ける被害は左の如くであつた  
 車輛の被害―客車の廢車五輛、貨車の廢車二十二輛、客車の破損三十三輛、貨車の大破二十二輛、貨車の小破百七輛、浸水手當貨車八百八十七輛等で損害額約三十萬餘圓  
 電氣施設の被害―通信信號及び保安設備、電燈電力設備、省線電車運轉設備及び省線電車客車々輛電氣設備の被害額約六十六萬圓  
 線路其他の被害の詳細は不明であるが大阪鐵道局管内全般に亘る



被 害 地 域 の 塵 芥 の 山



損害額は前記車輛及び電気施設の被害と線路其他の被害額を合せ約七百萬圓である

郊外電車

各郊外電鐵會社は何れも受電不能に陥り且つ線路破壊若くは電線路破損によつて電車の運轉を停止され、其の範圍は各社各線とも全線に亘つた

空 輸 機 關

日本航空輸送株式會社、日本航空輸送研究所、西田飛行機研究所及び國粹義勇飛行隊に於ては格納庫、飛行機工場、事務所學校講堂等に流失浸水大破の厄を蒙つた、此等關西に於ける民間航空界の損害額は約八十萬圓である

船 舶

外國貿易船の被害—合計十三隻、總噸數六萬七千餘噸、損害額百三十六萬圓  
沿海通航船の被害—合計二十三隻、總噸數二萬二千餘噸、損害額百十六萬圓  
市内三水上警察署の調査に依る船舶被害の狀況は左の如くである

汽 船	帆 船	發 船	小 船	計	沈没	陸揚	破損	流失	浸水	坐礁	計
三隻	八隻	九隻	五七五隻	七九七隻	一隻	一隻	一隻	一隻	一隻	一隻	三隻
二〇五	二七	八七	三〇	一、〇七	一	一	一	一	一	一	三
四八三	二六八	一、九六三	五〇九	三、二四六							

電信線路の罹障回線數は左の如くである

局 名	全回線數	罹障回線數	その割合
大 阪 電 信 局	三七〇	三三一	八九%

災害後通話不能となつたものは左の如くである

市 内 電 話	市 外 電 話	市内郵便局内通話所	公 衆 電 話	加入數	回線數	罹障中	罹障中
二九、二一〇	四〇五	七九の中	四二九の中	六九、九五〇の中	一、二二〇の中	二九、二一〇	四〇五

十月三日現在に於ける大阪中央電話局所屬加入者中電話機取付不能數は次の如くである

電話機取付不能總數	家屋流失	家屋倒壊	家人不在	燒 失
五三	二三	二一	八	一

ラ チ オ

大阪中央放送局は局舎に異狀はなかつたのであるが、當日午前七時四十分頃京阪電鐵及び日本電力の兩會社の電力が杜絶したほか、千里山放送所第二放送アンテナに故障を生じた

郵 便

浸水地域の大阪西、大正、大阪港、四貫島の各局では當日、各一號便の一部を集配したのみで二號便以下は殆んど休止した郵便物の被害—浸水三百三十九、倒壊五十、流失三、合計三百九十二  
郵便物の被害—代金引換十八、普通小包百四十三、書留小包六十一、普通通常一千七百六十九

風 水 害 概 況



三 應 急 措 置

**衣食配給** 九月二十一日災害の發生と同時に、本市は臨時救護部を設け、各區長を督して直ちに罹災救助に着手した。食糧、毛布、布團、衣類、莫産其の他雜品等を貨物自動車、乗合自動車等に満載し罹災地に急行せしめ、配給を行ふと共に現場に於て六千五百人分の炊出しを行つた。併し罹災地には尙ほ數尺の浸水あり、殊に大正、此花、港の各區方面には木材、難波船、船體の破材等道路に横はり、配給品の運搬意の如くならないで救濟上甚だ困難を極めた。幸に地元及び他區の青年團、在郷軍人會、國防婦人會等の出動應援を求め浸水地を徒涉して配給品を肩上に荷負ひ、或は公園用「ボート」を利用して水上の運搬に便する等、凡ゆる方策を講じ配給の徹底を期した一方、地元及び他區民の應援を得て炊出しを行つた結果漸次配給の順調を見、二十三日に至り早くも六十萬食以上を供するを得、爾來幸に救援の實を擧げ得た。

今配給を行つた主なるもの(九月三十日現在を擧ぐれば左の如くである。

白米	一、七六、二〇食	毛布	九〇、〇〇枚	罐詰	五六、九〇個
パン	一、九八、八〇食	衣類	七四、〇〇着	梅干	四三、三〇人分
辨當	六、〇〇食	莫産類	二五、〇〇枚	蠟燭	四七〇、〇〇本

右配給品の調達に就いては陸軍の好意により、軍用パン、白米、罐詰及び毛布、其の他炊出用具の特別供給を受け、海軍又二十二日吳鎮守府より派遣の驅逐艦「早苗」其の他がビケット二十一噸、罐詰十噸、白米、毛布、醫療材料其の他を満載して來航し、又各種團體、名古屋其の他の諸市及び新聞社受付寄附中からの割當提供も巨額に上つた。又此等のもの、運搬に就いては、車輛の徵發に就いては大阪府警察部の援助を、物品の運搬に就いては他都市の應援を受けたので配給上多大の便益を得た。

以上本市救護部より直接配給をしたもの、外、被害の比較的僅少であつた北、東、西、南、浪速の各區民より左に示す如く辨當、衣類等の寄附があり、夫々罹災區に配給した(九月二十八日現在)。

白米	一〇〇石	衣類	三六、九〇個	其他	十三種 四〇、九七個
辨當	一三、四三八分	毛布	八五枚		

斯くて大災害に即した罹災救助の大半を終了した爲めに、九月二十八日頃より配給を減少し、配給先を限定して濫給の弊を未然に防止し、十月五日に至りて罹災救助に於ける衣食の配給を打切つたのである。

**醫療救護** 災害發生と共に市は市バス五臺に醫師八名、看護婦十五名、雜役其の他二十二名を



搭乗せしめ、之に擔架醫療材料を満載し、救護班として現地に急行したのを最初に、市設醫療機關を以て二十數班の救護班を編成し、又赤十字社其の他の應援を得て災害地區役所に於て負傷者の手當を行つた。二十二日より移動救護班十班を組織して罹災地を巡廻する外、十三ヶ所の臨時診療所を設備して醫療救護に當り、九月二十九日までに診療したる人員は延一萬三千百餘人であつた。尙ほ公私各種團體も夫々救護班を罹災地に派遣して懇切なる救護に當り、其の救療人員は六萬四千九百人に及び、殊に第四師團軍醫部は固定救護班六班乃至八班、移動班四班を組織して罹災各地の醫療に従事したが、其の救療數は三十日迄に一萬七千餘人であつた。又、大阪港に碇泊中の軍艦勝力は二十四日より市内に臨時救護所を設け罹災傷病者の救護に當つた。

一方本市營市民病院に傷病者收容の爲めに臨時に病床二百の用意をする外、附屬診療所(五ヶ所)及び健康相談所(四ヶ所)に於ても診療時間を繰上げ延長を行つて、専ら罹災者の救療に従事し、十月一日迄の取扱人員は三千二百人に達した。

水害地域の家屋は浸水の爲め、寢具其の他家具類に海水濁水浸透したるもの多く、惡疫發生の虞があつたので之が防疫の爲めに區役所、衛生組合を通じ浸水地域内居住者に消毒用として各種の消毒劑を配布したが、其の主なるものは「クレゾール」二萬二千六百本、生石灰四千三百罐、

「カルキ」二千二百二十箇、疫痢内服「ワクチン」九萬一千二百五十箇等であつた。尙ほ腸チフス豫防注射班十一を派遣して豫防注射を施行し、十月一日迄の施行人員は七萬五千六百人であつた。此の外、傳染病豫防宣傳として「ポスター」を作製して各被害地に配布した。

**浸水の排除** 高潮の爲め市内西部一帯浸水し、其の甚しきは地上八、九尺に及んだが、退潮と同時に漸次減水を見た。併し暴風雨と同時に停電及び浸水の爲めに、市内抽水所全部が運轉を停止されたので低地部の浸水は容易に去り難く、爲めに交通上種々の困難を來した。浸水が長期に亘れば必然惡疫流行の虞があるので排除に各般の努力を重ね、先づ抽水所唧筒室内の排水並に浸水機械の修理を爲し、極力排水機能の回復に努めた結果、間もなく一部機能を挽回し、一方送電回復に依り漸次排水機能を發揮することを得た。併し一部に於ては尙ほ排水機能の回復を見ない爲めに、己むなく堤防及び道路の一部を破壊し、又は運河、河川附近の適當な箇所を掘割る等非常手段をとり、且つ「ガソリン」唧筒を各所に備へて低地の排水に全力を注いだ。其の結果浸水地區は全般的に漸次退水し、比較的減水の永引いた西淀川區川北方面一帯、傳法町及び港區南市岡、八幡屋方面並に住吉區北加賀屋町、此花區春日出及び恩貴島方面等も月末に至つて全く減水し平常に復するに至つた。唯西淀川區中島町、布屋町、矢倉町、西島町一帯(戸數約三百戸)は決潰



した堤防の復舊が困難な爲め、満潮時には尙ほ浸水する状態であつたので、此の方面の浸水排除は大阪府と協力し應急處理に努力した。

**交通障害の除去** 高潮は船舶、材木及び難破船の破材を道路上に押し上げ、街路樹の倒木及び倒壊せる民家の爲めに道路交通は殆んど妨げられたので、食糧其の他の救護品の運搬、罹災民の復舊工作に支障を生ずることが甚大であつた。依つて災害後直ちに應急處理班を設け、道路上の障害物を除去すると共に路面の應急處理を爲し交通路の開拓に努めたのであるが、一方各河川にも難破船材の堆積、沈没船があつて水上交通は全く杜絶したので、沈没船主に戒告を發し大阪府と協力して漸次撤回に努力した。又九月二十四日より三十日迄吳鎮守府より派遣せられた黒神、片島の二艦は大阪港の掃海作業を援助せられ、大體舟運に支障を來さざるに至つたが、其の後も本市の手に於て引續き掃海作業を行つた。

廣大なる浸水地域に於ける街路上の瓦礫、汚泥、濡れ壘等を除去する爲めに本市が取敢えず設けた街路清掃班は十七班に達し、二十三日より「トラック」二十臺を以て活動を開始し、漸次其の能率を上ぐるに努力した。浸水した古壘は一枚の重量三十貫に上り、汚泥、瓦礫、塵芥を合せ二萬立坪の巨量に上り、之が清掃は最も難事とする折柄二十六日の降雨の爲め状態は益々悪化し

た。併し之が排除は凡ゆる復舊工作中最も急を要するものであつたので、二十七日より清掃班の組織を擴大し「トラック」百數十輛、馬車二百輛、小型運搬車二百輛を備へ、之を港、大正、此花、西、浪速、西淀川、西成、住吉の各區罹災地に配置した。一面各地元衛生組合に對し合計四萬二千圓の清掃費を交付して、横町路次内の搬出作業を分擔せしめ、市は専ら主要街路に於ける堆積物の運搬に主力を注ぐ方針をとつた。斯くて十月二日迄に本市及び衛生組合に於て使用したる車輛延數は「トラック」四千三十二輛、「リヤカー」千五百六十六輛、馬力五千四百六十五輛、塵埃車一萬二百十輛、小車九十六輛に上り、使用人夫は一萬六千四百人に達し、清掃したる塵埃は約六百三十八萬六千匁(約百七十萬三千貫)汚泥、瓦礫は約三千百九十萬五千匁(約八百五十萬八千貫)濡れ壘は十八萬一千七百枚に上つた。右の外東京市、名古屋市、神戸市其の他より街路清掃の爲め應援を受けたるもの「トラック」延百七十四輛、馬力二百七十四臺、人夫一萬三千八百人に及んだのみならず、浸水地域各戸の溜置便所は概ね満溢し、憂ふべき屎尿洪水の状を呈したので、其の汲取の爲め本市は二十五日より浸水地衛生組合に對し應援人夫を配し之が非常汲取に當らしめた。其の人夫配置數延二千二百名に達し、汲取戸數は八萬戸以上に上り、十月二日を以て大體完了した。



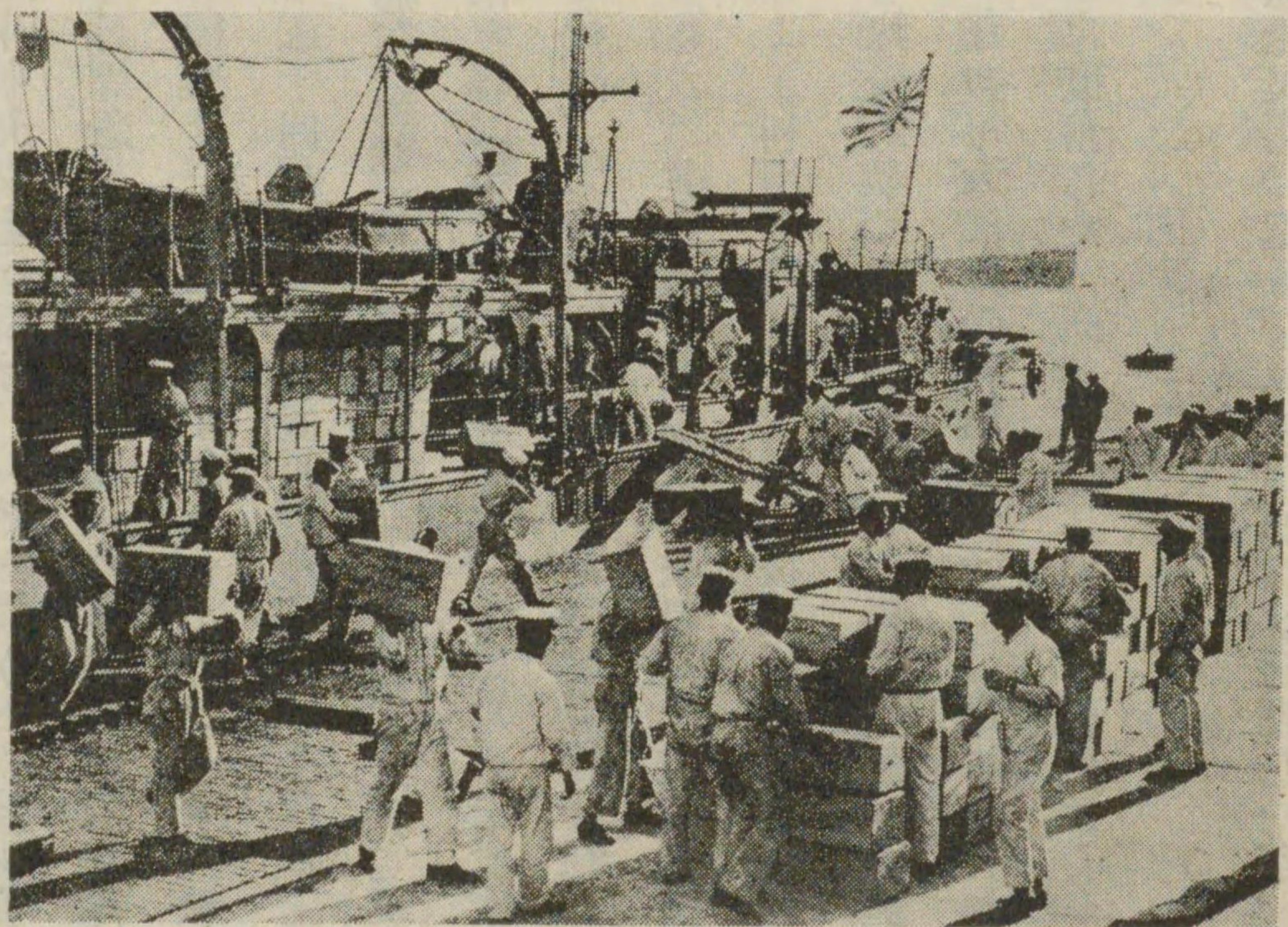
**火葬** 本市葬儀所は平常毎日一回焼屍作業を行つてゐたが、災害に際しては市葬儀所九ヶ所（燻數二百五十七爐）の中春日出、小林兩葬儀所は、建物の一部の倒壊、火爐浸水、器具流失等の爲めに作業が全く不能に陥り、容易に復舊の見込立たなかつたし、又、寢屋川、佃の兩葬儀所は重油燃焼装置を爲せる爲め、電動力の停止や水道斷水に因つて平常の機能を妨げられたので、薪を代用して辛うじて一部の作業を繼續した。薪炭混用爐である阿倍野、長柄、住吉、松原、平野の各葬儀所では、一日二回乃至四回の焼屍を實行して殆んど晝夜連續作業を繰り返しつゝ、極力屍體の停滯無きやうに努めた。其の後、小林葬儀所に應急處理を加へ、漸く九月二十九日より火葬を開始した。九月二十二日以降十月一日に至る間に於ける罹災者の火葬取扱件數は九百四十五件に達したのである。

**軍隊の救援** 災害當時は夜間にあつても點燈がなく、全市暗黒街を呈したので、本市は救援の目的を以て第四師團に出動を懇請したところ、直ちに軍隊を派遣して非常救援に當られ、更に工兵隊を活動させて障害物の除去に力を盡された。二十四日以降は大正、港、此花區等の浸水地域の人心の安定を計る爲め、特に巡察隊を派遣された。大阪港内外には吳鎮守府より若竹、早苗、勝力の三艦が派遣され、海上の安全を期したのであつた。一面青年團及び防護團の活動を促し

市内の警備に當らせたが、之が爲め府警察官の周到なる警備と相俟つて、市内の秩序は遺憾なく維持せられ、人心の不安を一掃するを得たのである

#### 四 復舊及復興計畫

**本市公營物の復舊** 災害による本市各施設の被害は前述の如くであるが、其の復舊如何は直接市民生活に影響するところ大なるものがあるので、本市に於ては直に災害の翌日參事會員の參集を請ふて先づ應急處理費五十萬圓の豫算の議決を得、二十五日には更に市會を開いて應急處理費百萬圓の追加議決を得たる外、總額千二百七十九萬餘圓に上る復舊豫算の議決を得、全力を舉げて市施設の復舊に當つた。其の詳細は左の如くである。



(橋棧港築) 揚陸品恤救の軍海



教育施設——災害の翌日直ちに區長及び校園長臨時專決規定を設け、一校園當り五百圓程度の渡切經費を配當して、小修繕を始め校舎残骸の後片付等急施を要するものにつき應急措置を講じ一方直に風水害により喪失せる教室の回復を圖り、復興までの暫定的手段としてバラック假教室の建設に着手した。假教室は九月二十五日の市會で五十四校、其の經費百五十八萬八千餘圓を議決せられたが、此の日議決せられた教育施設の復舊費は總額二百六十四萬六千餘圓に上つた。更に十月二十四日の市參事會で百五十八萬圓の追加議決を得、復舊に遺憾なきを期することゝなつた。

港灣施設——海軍其の他の援助の下に掃海作業を行ひ、大棧橋は殘存せる部分を應急修理して之に木造假棧橋を急造繼ぎ足して延長約百五十米とした。其の他の棧橋及び繫船岸は被害比較的輕微にして船舶繫留に支障なく、既に九月二十三日より利用を開始し、其の後上屋の復舊進捗に従ひ利用は平常に復し、一方給水用船及び曳船等も比較的早く略々回復するを得た。上屋倉庫は大棧橋北側上屋五棟を始めとして漸次復舊し、十一月初旬大部分の利用を開始し、之より先漂着物の堆積に因つて交通困難に陥つた道路も十月中旬に復舊した。此の復舊に要した經費は百十萬圓に達した。

土木施設——道路、橋梁、公園、動物園等各々應急復舊の處置を取り遺憾なきを期したが、九月二十五日市會の議決を経たる應急復舊費は七十萬圓を越えた。

軌道、自動車、電燈——本市電氣供給事業が平常の状態に回復したのは九月二十七日である。軌道は春日出櫻島間、玉船橋千船橋間、三軒家鶴町間方面を除いては、二十五日に於て完全に回復し、殘餘も間もなく運轉を再開した。復舊經費豫算額は營業、發電、送電、變電、配電設備等電力關係三百七十六萬餘圓、電線路、軌道、車輛等軌道關係百七十七萬餘圓、自動車關係七萬圓の巨額に達したのである。

下上水道——主要なる應急復舊のうち、最も急を要したのは抽水所設備である。恩貴島、小林各抽水所は十月十日に於て應急作業を打切り平常に復し、十二日櫻川、市岡の復舊成り、翌十三日には境川、十六日には傳法の復舊を完了した。上水道に於ても漸次水管設備の完備するに従つて平常に回復したが、上下水道の爲めに計上された豫算は總額十萬圓である。

産業施設——中央公會堂、天王寺公會堂、公設市場、中央卸賣市場、工業研究所等の被害に對する應急復舊費は十二萬一千餘圓で夫々間もなく復舊を了した。

保健施設——浸水地域の街路上に散亂せる塵埃、木塊、瓦礫、泥土、古壘等の除去の爲めに九月二十三日より十月十八日に至る二十六日間を費し、此の經費總額は七十六萬一千餘圓に達した。



此の外被害を受けた各保健施設の復舊豫算は二十五日市會議決を得たもののみでも三十八萬圓を超え塵芥搬出等應急處理に要した費用を合算する時は總額百三十五萬圓に達する。

社會施設——住宅、浴場、託兒所、市民館、融和施設建物、共同住宅、無宿者保護所、職業紹介所、共同宿泊所、宿舍及び無料宿泊所等復舊を要するもの多く、其の經費豫算は五十三萬餘圓に及んだ。

産業の復舊 商工業の復舊狀況の概要は左記の通りである。

商業——被害の最も激甚なる港、大正、此花、西淀川各區工場地帯の小賣店は、風害と高潮による浸水を蒙つた爲め、店舗内泥土、剝落せる壁土等の掃除、浸水商品及び帳簿類の整理等の爲めに數日乃至一旬を要し、更に平常の状態に復歸したのは十月下旬より十一月下旬に至つた。又各倉庫業者は出来るだけ貨物の損傷を防ぎ貴重貨物の安全保管に努力し、一方貿易方面の直輸入業者、取扱業者、製造業者等の復舊に對する懸命な努力により、輸出は十月上旬より相當復活し、輸入に於ても棉花に對する紡績業者の買付が風水害後著しく増加してゐる爲め漸次増加し爲替安の氣配濃厚と共に貿易額は漸増した。公私設小賣市場は風害のみを蒙つた市場は其の復舊が比較的早く、風害と水害を同時に蒙つた港、大正、此花、西淀川の各區内の市場は、浸水商品其の他物品の被害は勿論、屋根飛散、壁剝落其の他の修理の爲め復舊に相當の日時を要した。

工業——風水禍により異狀な打撃を蒙つた西大阪工場地帯は鐵鋼、製管、電線、製鐵、車輛の大工場を始め、化學、藥品、肥料、砂糖等の各種重要工業の中心地帯であつただけ、風水害直後、復舊作業は晝夜兼行で進められ、災害後の九月二十五日には早くも部分的操業を開始した工場も現はれ、大正區、港區、此花區の被害甚大なる重工業各工場も略々回復の目途が立つに至つた。大阪府調査に依れば、十月一日に完全に復舊せる六百五十の大工場中約半分は重工業である。金屬工業は十月中には平常に復し、化學工業關係工場の回復も十月下旬乃至十一月上旬にかけて全部舊態に復した。機械工業に於ても一二を除いては何れも目覺ましい復興振りを示し、早きは災害後二三日を出ずして操業開始した工場もあり、大部分は災害後二旬以内に平常に復した。纖維工業は浸水による直接被害を受けた工場は約二十ヶ所であるが、十月上旬以内には全部操業の開始を見た。其の他の主要なる工業に就いては、セメント工場は十月上旬以内に、又一時全滅を傳へられた琺瑯鐵器二十四工場中十五工場は、災害後一週間にして七割は操業を開始し残りの工場も十月中に殆んど全部回復した。

電力——災害突發と同時に、宇治川、大同、日本の三大電力會社等は、何れも浸水せる發電所、變電所其の他送配電線の應急修理と復舊に全力を傾倒し、災害當夜早くも一部送電に成功し





童學す搜を品用學

た大同電力を始め、日本電力、宇治川電氣も漸次送電可能となり、一般需要家に於ける電氣使用設備の漸進的恢復と相俟つて、電力供給状態は急速に立直り、災害後二旬を過ぎずして大體平常に復することを得た。

瓦 斯——大阪瓦斯株式會社及び浪速瓦斯株式會社は、何れも各瓦斯製造工場の復舊作業に全力を集中し、大阪瓦斯株式會社岩崎町工場に於ては二十三日第二室窯作業の復舊を最後として全部常態に復し、舍密工場の復舊と共に二十九日に至り瓦斯供給は完全に復舊したのである。一方、浪速瓦斯株式會社瓦斯製造工場は風害のみであつた關係上復舊意外に早く、風水害當夜、電力會社よりの送電と

同時に平常に復した。

交通及通信機關の復舊 交通及び通信機關の復舊概要は左記の通りである。

鐵 道——大阪鐵道局管内主要線及び市内各省線電車線の復舊状況を見るに、東海道線瀬田川鐵橋上の列車顛覆現場の復舊作業は徐々に進捗して、九月三十日常態に回復し、上下線とも開通を見、吹田明石間、城東線、片町線の各電車線及び最も甚大なる被害を蒙つた西成線は二十四日より何れも平常の運轉状態に復した。

郊外電車——各郊外電鐵會社の復舊状況を示せば左の如くである。

運轉一部開始	平常復歸	運轉一部開始	平常復歸
阪神急行電鐵 二十一日午後三時三十分	九月廿三日	南海鐵道 大阪住吉間 廿一日午後十時	九月廿八日
阪神電鐵 本國道線 廿一日午後七時卅分	同 廿七日	大阪鐵道 其 他 廿二日早朝	同 廿一日
京阪電鐵 新京阪線 二十一日午後四時	同 廿六日	阪和電鐵 二十一日午後四時	同 廿八日
京阪電鐵 京阪線 二十一日午後六時	同 廿七日	新阪堺電鐵 電車二臺ミテ一部運轉	十月十六日
大阪電氣軌道 二十一日午後三時	同 廿八日		

空輸機關——日本航空輸送株式會社は九月二十一日旅客及び郵便物の輸送を休止し、二十二日より二十九日迄城東練兵場に於て空輸を行ひ、三十日木津川飛行場の修理完成すると同時に、航



空輸送は平常に回復した。

船舶——築港を初め各河川には難破船千數百隻に上り、破材等の漂流物の爲め全く交通杜絶の状態となつたので、府市のランチは驅逐艦「若竹」「勝力」「片島」「黒神」と協力して、港内は勿論、安治川、木津川等約一裡に亘つて沈没船の發見、危険物の標示等の作業を行ひ、二十五日には港外待機の汽船が續々入港するに至つた。商船天保山棧橋も臨時神戸港で發着してゐたのであるが十月一日から復舊開航した。

電信——災害と同時に全力を擧げて復舊に努めた結果、漸く二十二日午後五時頃に至り他線代用又は迂回通信路により通信するに至り、二十四日午前九時には新京、佐世保を除くその他の重要局間は全部復舊し、直接通話連絡を見るに至つた。

電話——甚大な被害を蒙つた市内電話線路は短時日の中に應急修理を施し全通したが、其の儘では永久施設としては適應しないので、當局は復舊費を昭和九年度及び昭和十年度に分割し、總額七十萬餘圓を以て回復に努めた。

郵便——南海鐵道不通に伴ひ大阪堺間、大阪和歌山間及び岸和田和歌山間、佐野和歌山各局間は貨物自動車に依り臨時遞送便を開設した。二十三日に至つて難波貝塚間、二十四日に難波佐

野間と順次開通し、二十五日には全通するに至つたので、同時に遞送事務が舊に復した。大軌線不通に對しては、大阪枚岡間に貨物自動車に依る臨時遞送便を毎日往復し、又京阪電車線不通に對しては、大阪京間に毎日二往復の自動車遞送便を用ひ、沿道各局に發着する郵便物を遞送に便した。東京大連間航空便の當地に於ける發着地は木津川飛行場であつたが、同所は使用不能となつたので九月二十一日より二十九日まで城東練兵場に變更して航空遞送の疏通を期した。其の他鐵道線路の不通に伴ふ大量郵便物の輸送に關しては水路便の利用、自動車又は人夫に依る連絡其の他迂迴遞送等で夫々適當な措置を講じ、遺憾なきを期した。

本市公營物の復興計畫 本市に於ては今回の經驗に鑑み、將來の災害に備へる爲め各方面の權威者と計り次の如き復興計畫を定め、目下着々實施中である。

教育施設——全壞、半壞せる被害小學校數は百七十六校で、其の面積は延四十六萬八千六百平方米であるが、此の復興は鐵筋コンクリート建八割、木造建二割の基準で施行せんとするものである。其の復興費は昭和九年度より十三年度に至る五ヶ年繼續事業として二千八百六十萬圓が計上された。此の外現に施行中である昭和八、九、十年度繼續事業中、新增築二十六校の木造計畫の内一部を這般の風水害に鑑み、鐵筋コンクリート建に變更する爲め、所要經費百五十萬圓（三



ケ年繼續事業)を既定繼續費に追加した。中等學校の復興費は昭和九年度より十三年度に至る五ケ年繼續事業として二百八十萬圓であるが、其の内市立扇町高女外六校の一部又は全部の改築費は二百四十萬圓であり、西區に於ける學區經營の西華高等女學校の改築に就いては其の資金として四十萬圓を交付した。幼稚園舎の復興費は三十萬圓で昭和九、十の兩年度事業として明治外十一園舎を木造平家建に改築するものである。

港灣施設——港灣の復興計畫は、左記の如く専ら將來の被害を可及的に輕減することを第一主義として、港灣利用上不足する點は次期の計畫に俟つこととし、復興費二千萬圓を以て、昭和十四年度迄に完成せんとするものである。

(一) 風潮防禦陣の第一線として最も堅牢強固な外廓防波堤を構築し、更に内港樞要の箇所に波除堤を新に築成し、波浪の破壊力を減殺すること

(二) 内港域を擴張して安全なる錨地を擴大すると共に在港船の守錨避難措置を採るに便ならしめること

(三) 小船の溜場及び避難場を整備充實すること

(四) 海運木材の整理、貯木の施設を完備すること

土木施設——其の復興は三ケ年繼續事業として豫算總額は百八十萬圓である。主なるものは、最も緊要なる喜連敷津線一部の新設擴張並に北港大橋、千歲橋、千北橋、入船橋、千船大橋の大

改築である。

産業施設——空堀公設市場外四ヶ所を復興することとし、その經費は二十一萬圓である。

保健施設——保健施設の復興計畫並に其の費用の内譯は左の如くである。

(一) 防疫消毒所を桃山病院敷地内へ移轉復興すること、費用十五萬九千圓

(二) 結核療養所の木造病舎二棟を鐵筋コンクリート五階建一棟(延二千六百八十三平方米)に復興すること、費用二十二萬六千圓

社會施設——社會施設の復興は、職業紹介所一ヶ所と、公益質舗二ヶ所の建設である。職業紹介所は、倒壊せる築港職業紹介所とも共同宿泊所に設置せる九條職業紹介所を合併し、新に西部方面に土地約一千平方米を借入れ、鐵筋



大阪港内に於ける遭難船舶



コンクリート造（延千三百八十六平方米）三階建を經費十二萬圓を以て設置せんとするものである。質舗建設は風水害以來の必要に鑑み計畫せられたものであつて、二ヶ所に、三萬圓宛を以て鐵筋コンクリート造三階建を建築し、附近の需要に應ぜんとするものである。

此の外上下水道に就いても災害に鑑み、供給電力の停止に對する設備の擴充を主として既定計畫の變更を行ふこととし、慎重審議の上十年度豫算に之を計上することとした。

### 三 故關大阪市長の市葬

關市長は昭和十年一月十四日以來風邪氣味で、天王寺區上本町八丁目の自宅に引籠り靜養されたのが、遂に二十四日腸チフスと決定され、既に腸出血と高熱の爲め危険を報ぜられた。關市長の病篤しとの報一たび傳はるや、後藤内相の真情溢るゝ再三の飛電を初め、多數名士の見舞あり殊に市關係者は勿論、市民も亦齊しく其の容態を憂慮して、回復の速かならんことをひたすら希ひ、或は神佛の祈願に、或は靈藥の布施に、或は輸血の志願に其の誠心を表はした。併しそれも空しく、遂に一月二十六日午後十一時十分、穏やかに眠るが如く卒去せられた。行年六十三歳である。

翌二十七日午後四時半から阿倍野新齋場に於て密葬が執行され、「崇功院德譽關一逸生大居士」の位牌と、生けるが如き氏の肖像畫は、淋しく在りし日を偲ばせた。關市長の病氣危篤と聞くや安井府知事は關市長の勳功に酬ゆる爲め、昇位昇勳の内申を内務大臣に提出せられ、内相初め内閣に於ても、關市長の生前の勳功に對して特別の取計ひをせられ、二十九日夕刻故關市長に對し畏くも特旨を以て從四位に叙せられ、叙勳三等授旭日中綬章の恩命を賜つた。更に翌三十日には宮内省から特別の思召を以て祭資御下賜の御沙汰があり、誠に破格の御取扱を蒙つたので故人は固より本市としても誠に之を光榮としたのであつた。

今日の大大阪の姿は、關市長が卓越せる學識と手腕によつて計畫大成せしもの多く、其の功績は歴代市長中拔群であり、殊に在職年限最も長く、而かも現職のまゝ他界したことゝて、大阪市の市葬の禮を以て酬ゆべしと云ふことに各方面の意見が一致したので、一月二十九日午前十時から緊急市會を開き、全員一分間默禱の後市葬執行の件（市葬費二萬圓）を上程して正式に決定した。

斯くて故關市長の大阪市葬は加々美市長代理祭主となり、葬儀委員長には川畑議長之に當り、二月一日天王寺公園廣場に設けられた齋場に於て神式に依り嚴かに執り行はれた。靈柩前には畏き邊りより下賜あらせられた祭資を初め、故人生前の榮譽を物語る勳三等旭日中綬章ほか、佛、





霊柩車の齋到場着

白國勳章、更に靈柩を圍んで 東伏見宮家 東久  
邇宮家より御下賜の御神が飾られ、祭壇前には供  
花の匂ひ馥郁と薫るなど、湿かなうちにも壯嚴極  
りなきものがあつた。殊に東久邇宮家よりは御名  
代として池田事務官を差遣はされたのは故人の餘  
榮此の上もなく、此の輝しい光榮には云ひ知れぬ  
感激を覚えしめた。

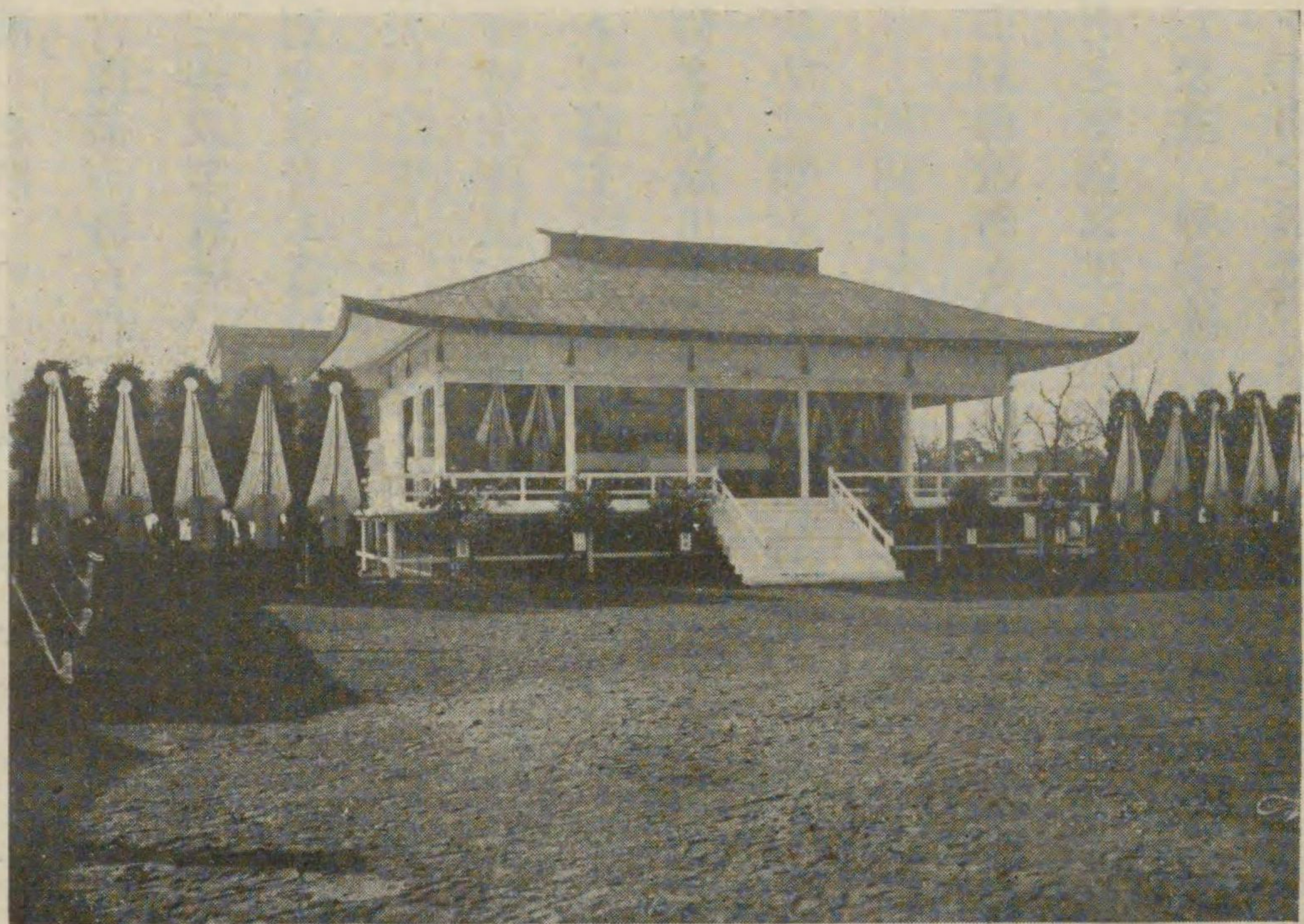
此の日午前十一時齋主高津神社宮司子爵池尻基  
房氏により發葬祭を執行し、同十一時四十分靈柩  
は關邸玄關より白木の靈柩車に移され、先驅伶人、  
祭員、齋主、勳章捧持者、祭資捧持者の各自動  
車に次いで靈柩車は肅々と哀愁の同邸を後にし其  
の後に喪主秀雄氏、次いで祭主加々美市長代理、  
葬儀委員長川畑市會議長、遺族、親戚、友人總代

葬儀副委員長の順序で一路齋場へ向つたが、沿道  
には學童約四千名、青年團並に青訓生、在郷軍人  
分會員各約二百名、國防婦人會、愛國婦人會員四  
百五十名等約五千六百名及び一般市民ら多數並び  
其の心こめたる弔送を受けつゝ正午齋場に到着し  
た。

齋場一體は鯨幕を張り巡らし、北面の祭壇は純  
白に、杉皮葺の屋根も神々しく、各方面から贈ら  
れた五百餘對の榊が林立し、花輪も加へて所狭さ  
まで埋められ、大阪市最初の市葬の盛儀にふさは  
しく水を打つたやうに静まりかへつてゐる。

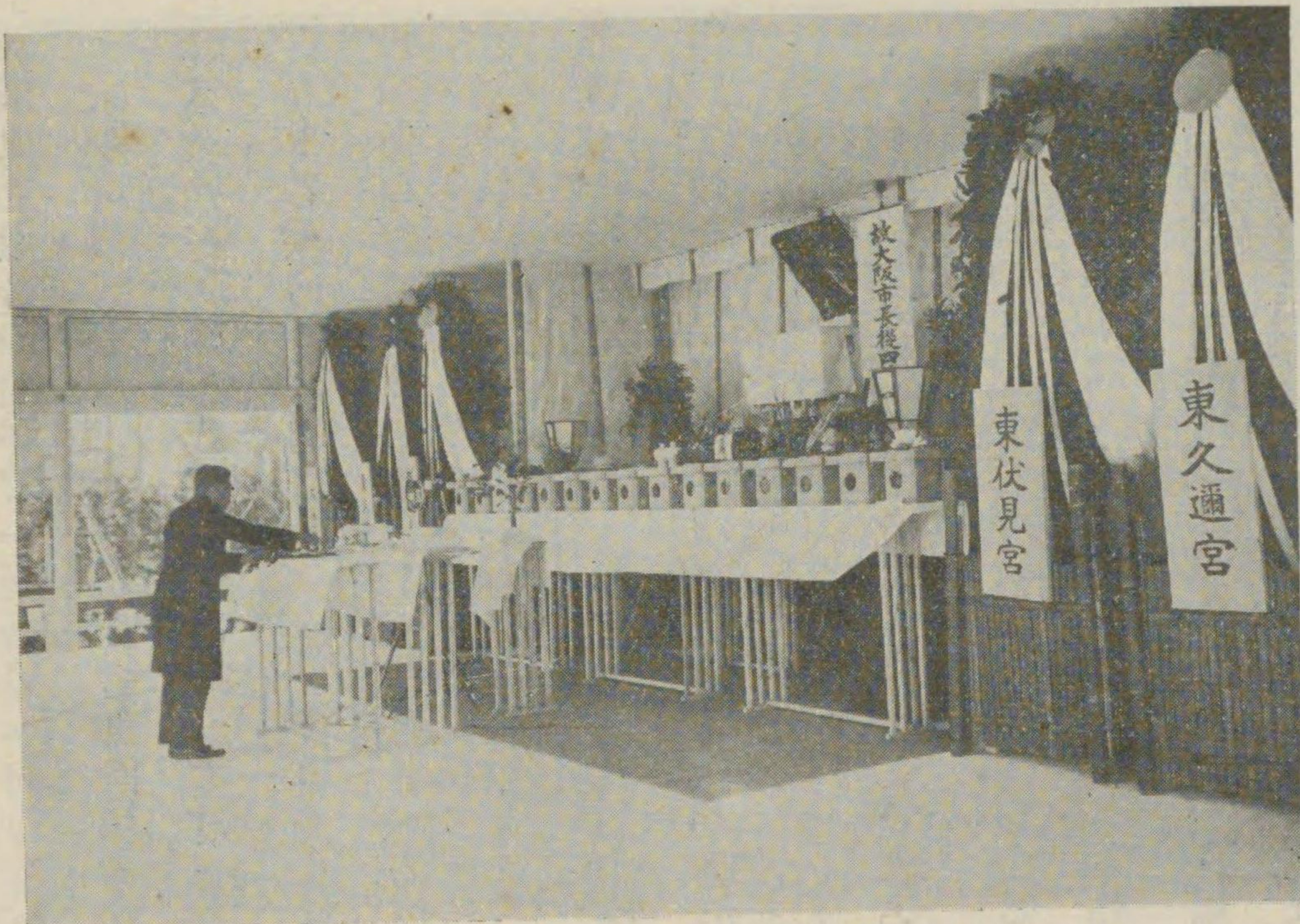
斯くて靈柩車は、市音楽隊の奏する「葬送行進  
曲」の哀調に伴れて、參列者敬禮の裡に肅々と進  
んで祭壇に安置、祭壇には「故大阪市長從四位勳

故關大阪市長の市葬



齋 殿





祭主加々美市長代理の玉串奉奠

三等關一之柩」の大銘旗が掲げられ、柩上には故人の肖像畫が飾られ、祭主、葬儀委員長、喪主、遺族、親戚等着席、安井大阪府知事初め二千五百の特別會葬者も着席し、午後一時葬祭の儀が開始された。

先づ齋主池尻高津神社宮司以下祭員に依つて献饌あり、齋主祭詞を白し、東久邇宮家より御差遣の御名代池田事務官徐ろに進んで玉串を供奠する。次いで祭主加々美市長代理祭文を奏し、弔詞に入り、岡田首相初め各大臣其の他官公民間代表者の弔詞朗讀あり、尙ほ百餘の弔詞と六百餘通の弔電とを靈前に供へ、齋主の玉串奉奠に次いで、喪主、祭主、葬儀委員長、親戚總代、參列者總代等夫々玉串を奉奠、參列者一同順次禮拜して同三

時葬祭の儀を終つた。

葬祭の儀終るや、直ちに市音楽隊の奏する「吹きなす笛」の悲愁漲る樂の音と共に一般告別式に入つたが、齋場入口より市電惠美須町、天王寺西門に至るまで東西より市民は踵を接して參集し、又市内各學校で遙拜式をすませた生徒、學童達も逝きし市長に取り縋るが如く參々伍々父兄に附添はれて靈柩に禮拜した。會葬者の數は刻々に増して無慮八萬に達し、文字通りの市民葬として盛儀を極め、午後五時過ぎ齋場に起る奏樂裡に神饌、幣帛を撤し、薄暮迫るうちに盛葬は終りを告げた。

尙ほ此の日市廳舎、電氣局を初め各區役所は何れも弔幕を施し、市電及びバスは黒布を附したる弔旗を掲揚した。市内各學校に於ては午後一時兒童に對して故市長に關する一場の訓話を爲し同一時二十分を期して全員天王寺公園なる齋場に向つて遙拜し、市吏員も午後二時より隨時參拜した。



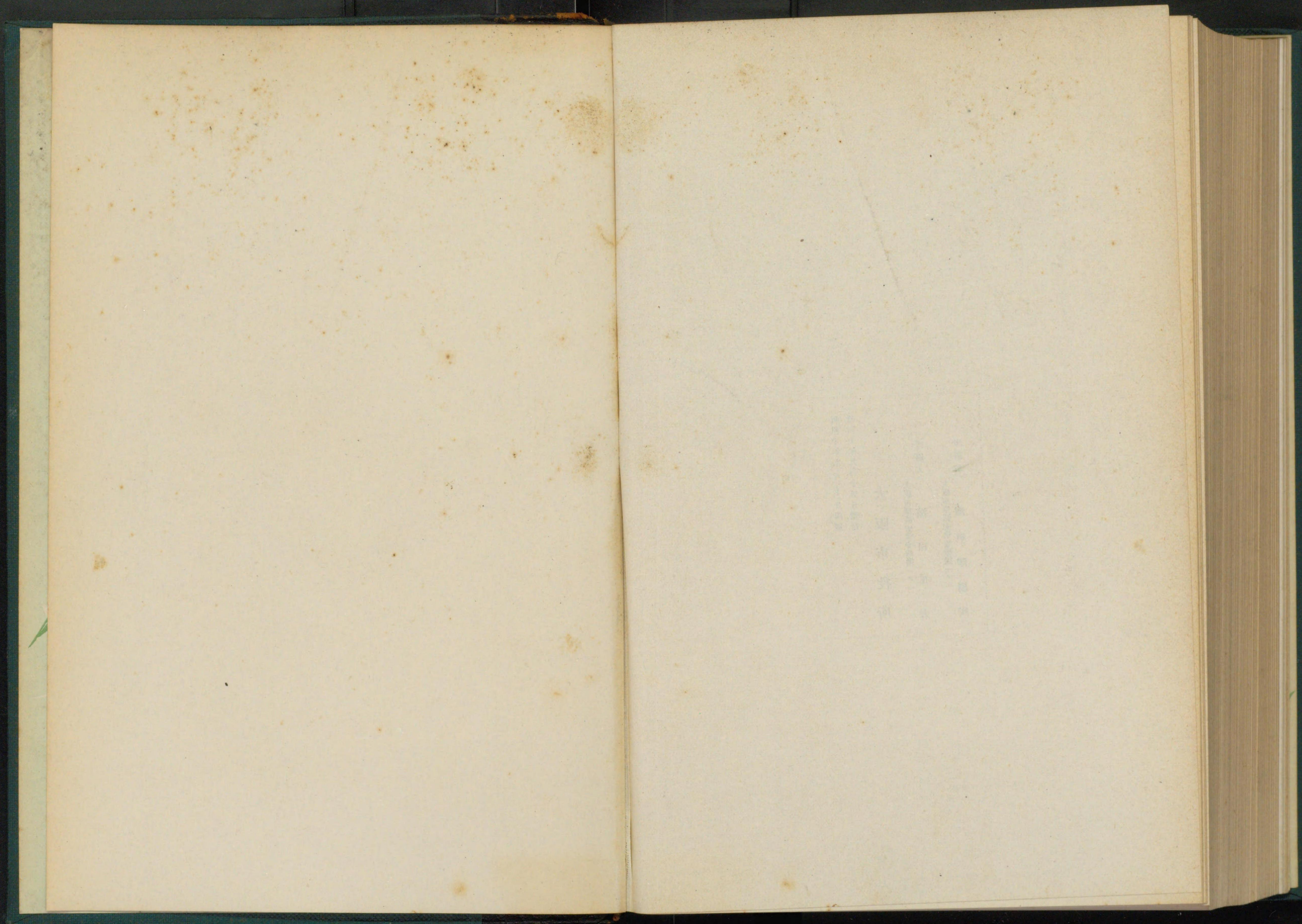
昭和十年九月十日印刷  
昭和十年九月十五日發行

大 阪 市 役 所

印刷人 大阪市南區安堂寺橋通一ノ一  
濱 田 正 夫

印刷所 大阪市南區安堂寺橋通一ノ一  
濱 田 印 刷 所







686  
55

